

3. 研究成果報告

高輝度電子ビームの発生と特性測定 — EO クロスコリレーションによる FEL ミクロパルス時間構造評価 —

産研量子ビーム発生科学研究分野^a、産研量子ビーム科学研究施設^b
川瀬啓悟^{a*}、入澤明典^a、藤本将輝^a、古川和弥^b、久保久美子^b、磯山悟朗^{a**}

Study of temporal structure of the FEL micropulse via EO cross-correlation

Dept. of Accelerator Science^a, Res. Lab. For Quantum Beam Science^b

Keigo Kawase^{a*}, Akinori Irizawa^a, Masaki Fujimoto^a, Kazuya Furukawa^b, Kumiko Kubo^b, Goro Isoyama^{a**}

A temporal structure of the FEL micropulse is studied using a cross-correlation technique with a Ti:Sapphire laser pulse using an electro-optic (EO) effect. As a preliminary result, we have a complex temporal structure of the micropulse for the high-intense operation of the FEL. The results show clear running traces of the optical pulses due to the cavity shortening for the detuning property of the FEL and also the evidence of the zero detuning operation of the FEL.

大阪大学産業科学研究所（産研）量子ビーム発生科学研究分野（磯山研究室）では、Lバンド電子ライナックを用いて、THz 領域の自由電子レーザー(FEL)を発生させ、その基礎的な物理を研究するとともに、高強度 THz パルスの利用研究のための開発研究を実施している。近年、バンチ電荷の高いライナック運転モードを構築し、世界的に見てもトップレベルの高強度性を持つ THz パルスを発生させることができるようになった[1-3]。

現在のところ、エネルギーが 15 MeV でバンチ間隔 37 ns、バンチ数およそ 200 個、バンチ電荷 4 nC の電子ビームを用いて、4.3 THz (波長 70 μm) のパルスをマクロパルスエネルギーで 20 mJ 以上、3 THz (波長 100 μm) で 3 mJ 以上の高強度 THz-FEL パルスを発生させている。マクロパルス内のパルス列構造の波形計測の結果より、マイクロパルスのエネルギーは最大で 200 μJ を越える強度と評価できる[4]。

光と物質の相互作用を研究する上で有用な物理量はピークパワーや集光強度である。そのため、これらの量を評価するためにはパルスエネルギーだけでなく、光パルスの時間構造（マイクロパルス構造）を評価する必要がある。また、パルス列の時間発展に対するマイクロパルス構造の発展を

調べることにより、FEL の基礎的な物理の詳細な研究につながることを期待できる。そのため、産研ではこれまでにマイケルソン干渉計を用いた THz パルスの構造計測を実施してきた[5-7]。しかしながら 1 次の自己相関計測では一般にパルス幅や構造に任意性があり、より詳細にパルス構造を議論するためには別の手法で計測することが必要である。そのために、THz パルスによる電気光学効果(EO 効果)を用いて、チタンサファイアレーザーによる超短パルス光とのクロスコリレーションを計測することにより、THz パルスの時間構造評価の試験研究を開始した。EO 計測の概略と実験セットアップ概要を図 1, 2 にそれぞれ示す。

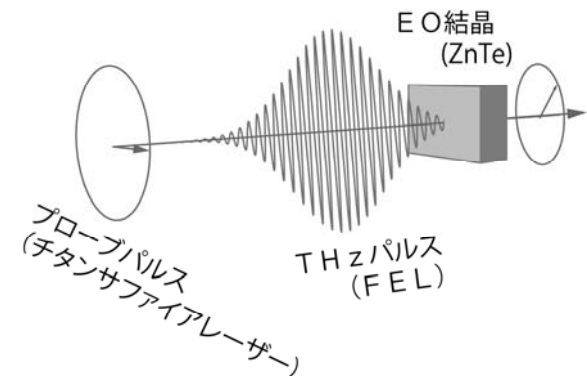


図 1: EO 計測の概略。THz パルスの電場による EO 効果で結晶の屈折率が変化し、その変化をプローブパルスの偏光変化で計測する。

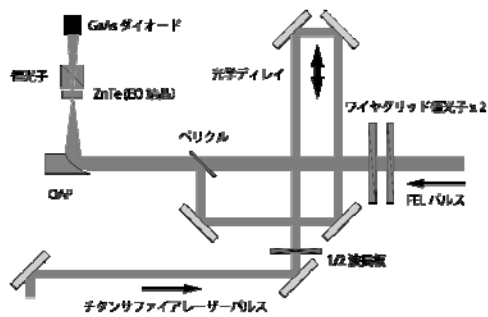


図2: 実験セットアップの概要。

これまでのところ、FEL のデチューニングを変えた場合、すなわち、光共振器長を変えることにより FEL の動作条件を変えた場合、その変化量に関連したクロスコリレーションの測定結果の変化を確認することができており、その詳細を研究している[8]。予備的な計測結果を図3に示す。一方、現在の手法によるクロスコリレーション計測は THz パルスの電場の位相とチタンサファイアレーザーパルスとは同期していない。そのため、計測はランダムな位相に対する平均値であると考えられる。また、THz パルスの強度は十分に高く、EO 効果は非常に大きい。そのため、計測結果の解釈には様々な効果を考慮することが必要であり、現在の検討課題となっている。

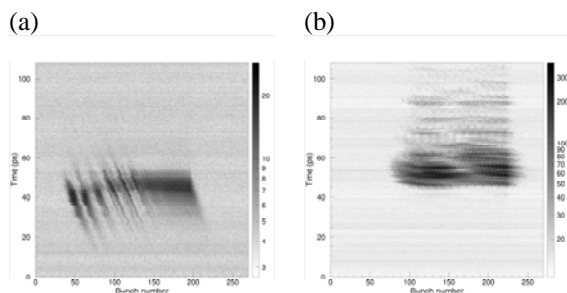


図3: EO クロスコリレーションによる THz-FEL パルス構造の計測の予備的な結果。(a)デチューニング 0.14 mm、(b)ゼロデチューニング付近。

今後、EO 計測における信号強度の定量的な評価を詳細に実験研究することにより、THz パルス強度の定量的に評価する。

Reference

- [1] K. Kawase et al., Nucl. Instrum. and Meth. in Phy. Res. A 726 (2013) 96.
- [2] A. Tokuchi et al., Nucl. Instrum. and Meth. in Phy. Res. A 769 (2015) 72.
- [3] S. Suemine et al., Nucl. Instrum. and Meth. in Phy. Res. A 773 (2015) 97.
- [4] K. Kawase et al., “High Power Operation of the THz FEL at ISIR, Osaka University”, Proc. of FEL2014, Basel, Switzerland, p. 528 (2014); <http://www.JACoW.org>.
- [5] 古橋健一郎他、「干渉分光計を用いたテラヘルツ波 FEL のコヒーレンス長測定」、Proc. of Particle Accelerator Society Meeting 2009, Tokai, Japan, p. 468 (2009).
- [6] 大角寛樹他、「自己相関法を用いた FEL ミクロパルスの計測」、Proc. of the 10th Annual Meeting of Particle Accelerator Society of Japan, Nagoya, Japan, p. 163 (2013).
- [7] 矢口雅貴他、「干渉計を用いたテラヘルツ FEL の特性測定」、Proc. of the 11th Annual Meeting of Particle Accelerator Society of Japan, Aomori, Japan, p. 41 (2014).
- [8] 川瀬啓悟他、「電気光学サンプリングによる THz-FEL のミクロパルス時間構造測定」、Proc. of the 12th Annual Meeting of Particle Accelerator Society of Japan, Tsuruga, Japan, p. 174 (2015).

時間分解共鳴ラマン測定によるスチルベンの一電子酸化還元に伴う構造変化の検討

産研励起分子化学研究分野^a、産研量子ビーム科学研究施設^b

藤塚守^a、Dae Won Cho^a、藤乗幸子^b、Jungkweon Choi^a、真嶋哲朗^a

Detection of Structural Changes upon One Electron Oxidation and Reduction of Stilbene Derivatives by Time-Resolved Resonance Raman Spectroscopy during Pulse Radiolysis and Theoretical Calculations

Dept. of Molecular Excitation Chemistry^a, Research Laboratory for Quantum Beam Science^b

Mamoru Fujitsuka^a, Dae Won Cho^a, Sachiko Tojo^b, Jungkewon Choi^a, Tetsuro Majima^a

Stilbene (St) derivatives have been investigated for many years because of their interesting photochemical reactions such as *cis-trans* isomerization in the excited states and charged states and their relation to poly(*p*-phenylenevinylene)s. To clarify their charged state properties, structural information is indispensable. In the present study, radical cations and radical anions of St derivatives were investigated by radiation chemical methods. Absorption spectra of radical ion states were obtained by transient absorption measurements during pulse radiolysis; theoretical calculations that included the solvent effect afforded reasonable assignments. The variation in the peak position was explained by using HOMO and LUMO energy levels. Structural changes upon one electron oxidation and reduction were detected by time-resolved resonance Raman measurements during pulse radiolysis. Significant downshifts were observed with the CC stretching mode of the ethylenic groups, indicative of the decrease in the bonding order. It was confirmed that the downshifts observed with reduction were larger than those with oxidation. On the other hand, the downshift caused by oxidation depends significantly on the electron-donating or electron-withdrawing nature of the substituents.

Stilbene (St)誘導体(StD)は芳香族有機化合物の基礎的な構造を有することに加え、励起状態ならびにラジカルイオン状態で*cis-trans*異性化などの反応を示すこと、電導物性ならびに光学物性を示すpoly(*p*-phenylenevinylene)の最小単位とみなせることなどから長年にわたり多くの研究者により検討されてきた。われわれの研究グループはStDラジカルイオン種が二量体ならびに酸素付加などの反応を示すことからパルスラジオリシスを用いることにより、反応ダイナミクスを検討してきた。この一連の研究において、一電子酸化還元にもなう電荷の分布ならびに構造変化が種々の反応および物性に本質的に重要であ

ることを見出してきた。ラジカルイオン種の生成に起因する構造変化の検出には電子分光のみならず振動分光が不可欠であることから、本研究ではベンゼン環に様々な置換基を導入したStD (Fig. 1)のパルスラジオリシスと時間分解共鳴ラマン測定を行い、新たな知見を得たのでここに報告する。

Fig. 2にStDのDCE溶液のパルスラジオリシスにおいて観測された過渡吸収スペクトルを示す。生成したSt^{•+}は764と483 nmに吸収を示したが、置換基を導入したStD^{•+}の吸収はシフトした。これらStD^{•+}の吸収ピークの帰属を行うためにDFT計算を行ったところ、パルスラジオリシス測定で観測されたスペクトルの再現には、溶媒効果を含めることが必要であることが示された。可視域の吸収ピークはHOMO(α) (=SOMO)とLUMO(α)間の遷移に帰属され、吸収ピークシフトは主に置換基によるHOMOレベルの変化に起因することが確認された。同様にStD^{•-}の吸収スペクトルもDMF溶液のパルスラジオリシス測定により観測され、その吸収位置の変化はStD^{•+}の場合に比べ微小で

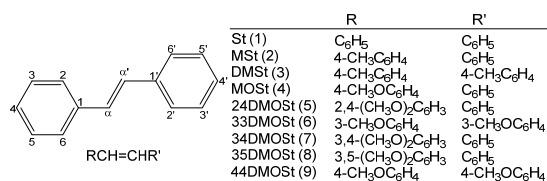


Fig. 1. Molecular structures of StD in this study. Numbers in the parentheses are used in Fig. 4 to identify the compounds.

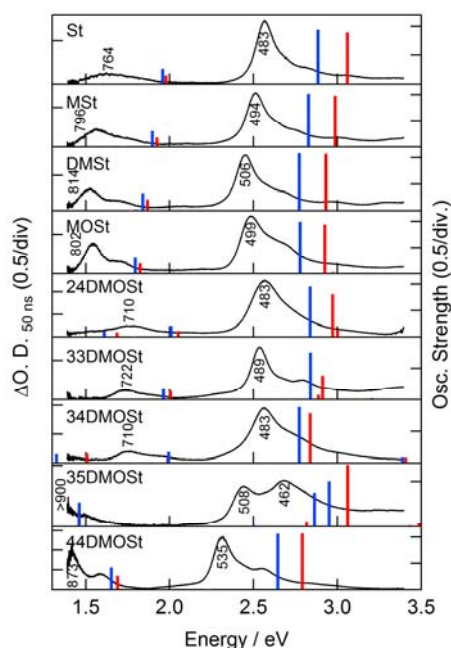


Fig. 2. Transient absorption spectra of the radical cations of StD measured during pulse radiolysis of St derivatives in DCE. Numbers near absorption peaks indicate peak positions in nm unit. Oscillator strengths calculated by TDDFT were indicated by bars.

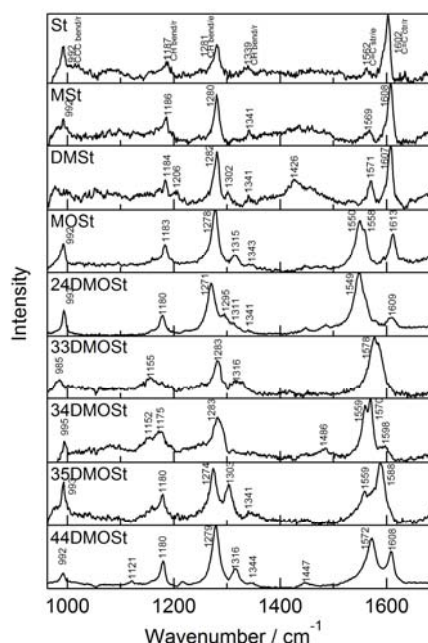


Fig. 3. TR³ spectra of the radical cations of StD measured at 50 ns after pulse during pulse radiolysis of St derivatives in DCE. Numbers indicate the peak positions in cm⁻¹ unit.

あった。

Fig. 3 にパルスラジオリシス-時間分解共鳴ラマン測定を行い、観測されたラマンスペクトルを示す。観測された St^{•+}のスペクトルは既報と一致し、本測定によりラジカルイオン種の共鳴ラマンスペクトルが良好に観測されることが実証された。観測された共鳴ラマンピークの同定は、TDDFT に基づき共鳴効果を考慮した分子軌道計算によりおこなった。StD が一電子酸化されるとそれぞれの共鳴ラマンピークのシフトが観測された。特に ethylene の C=C 伸縮結合に帰属されるピークが酸化にともない 57-87 cm⁻¹ 低波数シフトすることが観測された。このシフトは ethylene 結合が伸張に伴う結合次数の低下を示す。

同様に StD の DMF 溶液のパルスラジオリシス-時間分解共鳴ラマン測定において StD[•]の共鳴ラマンスペクトルを観測した。この場合も ethylene 結合の伸張を示す低波数シフトが確認されたが、置換基依存性は StD^{•+}に比べ小さかった。

Fig. 4 で観測された低波数シフトを Hammett's σ に

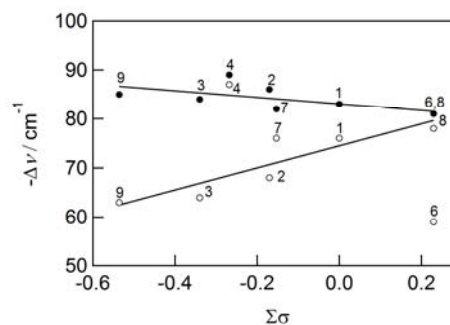


Fig. 4. Relation between Raman peaks shift (CC stretching of ethylenic bond) upon (open circles) oxidation or (closed circles) reduction and sum of Hammett's σ .

対してプロットすると、若干の例外を除き直線関係を示した。この結果は、StD^{•+}では電子供与性の置換基により結合次数が増加するのに対し、StD[•]では逆に電子供与性の置換基により結合次数が低下することを示している。

Reference

- 1) M. Fujitsuka, D. W. Cho, J. Choi, S. Tojo, T. Majima: *J. Phys. Chem. A* **119** (2015) 9816.

転写因子 SoxR のスーパーオキシドアニオンに対する反応性の制御

阪大産研量子ビーム物質科学

藤川麻由、小林一雄、古澤孝弘

Tuning of the Sensitivity to Superoxide in SoxR Protein, the [2Fe-2S] Transcription Factor; Importance of Species-Specific Residues of Lysines

The Institute of Scientific and Industrial Research, Osaka University

Fujikawa Mayu, Kazuo Kobayashi, Takahiro Kozawa

The [2Fe-2S] transcriptional factor, SoxR, functions as a bacterial sensor of oxidative stress in *Escherichia coli*. SoxR is regulated by the reversible oxidation and reduction of [2Fe-2S] clusters. We previously proposed that superoxide has a direct role as a signal for *E. coli* SoxR, and that the sensitivity of *E. coli* SoxR response to O_2^- is 10-fold higher than that *P. aeruginosa*. The difference between the two species reflects a distinct regulatory role in the activation of O_2^- . In order to investigate the mechanism underlying SoxR's different sensitivities to O_2^- , we mutated several amino acids which are not conserved in homologues in the enteric bacteria. The mutation of lysine residues 89 and 92 of *E. coli* SoxR into alanine, located close to [2Fe-2S] clusters, dramatically affected its reaction with O_2^- . The second-order rate constant of O_2^- with K89AK92A mutant was $3.3 \times 10^7 \text{ M}^{-1} \text{ s}^{-1}$, which was 10 times smaller than that of wild type. Reversely, the change in A90K *P. aeruginosa* increased the rate. In contrast, introductions of mutations (LQA \rightarrow RSD) in *E. coli* SoxR and the corresponding mutation (RSD \rightarrow LQA) in *P. aeruginosa* were not affected. Our findings clearly support a role of lysine is critical for the sensitivity of O_2^- .

はじめに

バクテリア内には、環境に応答して活性を持つ転写因子群 MerR Family が存在する。その中で SoxR は、センサー部位に[2Fe-2S] クラスターを持ち、その可逆的な酸化還元によって転写制御される。SoxR は種々のグラム陰性菌に存在するが、その生理的役割は菌種によって大きく異なる。*E. coli* では酸化ストレスに応答して転写活性を持ち、スーパーオキシドディスムターゼ(SOD)を含む酸化ストレス防御タンパク質の発現を制御している¹⁾。それに対して緑膿菌(*P.aeruginosa*)においてピオシアニンに応答し、抗生物質輸送タンパク質や分解酵素の発現に関わると報告されている²⁾。両者はアミノ酸配列が 62% identity とよく保存されているが、生体内での役割はこのように大きく異なる。我々は、パルスラジオリシ

ス法を用いて *E. coli* SoxR および *P. aeruginosa* SoxR の O_2^- との反応性に 10 倍以上異なることが分かった²⁾。本研究では、その反応性の違いを決める因子について、変異体を用いた実験を行った。**実験**

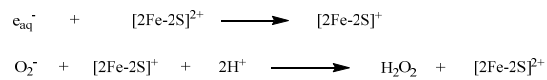
E. coli、*P. aeruginosa* SoxR は発現プラスミドを鉄イオウクラスター合成オペロンを含むプラスミドと共に *E. coli* C41(DE3)中で大量発現を行い、P-セルロースカラムとゲルろ過カラムにより精製した³⁾。

パルスラジオリシス法は KCl (0.5 M)、酒石酸ナトリウム (10 mM)、OH ラジカルスカベンジャーとしてギ酸ナトリウム(0.1 M)を含むリン酸緩衝液 (10 mM、pH 7.0) を用いた。酸素飽和の緩衝液に SoxR (70 μM)を加え、サンプルを調製した。

*K. Kobayashi, 06-6879-8501, kobayasi@sanken.osaka-u.ac.jp

結果および考察

E. coli SoxR を含む試料にパルス照射すると、以下の式に示すように、ナノ秒領域での SoxR の e_{aq}^- による還元過程と、ミリ秒で観測される O_2^- による再酸化過程が観測される²⁾。



この系に O_2^- 分解酵素である SOD を添加すると最初の還元過程に変化は見られず、再酸化の過程が消失する。この SOD の添加効果により、 O_2^- と SoxR の速度定数を決定することができる。

鉄イオウクラスター周辺に存在し、*E. coli* と *P. aeruginosa* の異なるアミノ酸配列に注目した。*E. coli* に存在する 89 および 92 番目のリジンが *P.aeruginosa* ではアラニンに、また *E. coli* に存在するループ 127 アルギニン、128 セリン、129 アスパラギン酸は *P.aeruginosa* ではロイシン、グルタミン、アラニンになっている (Fig. 1)。本研究では *E. coli* K89A、K92A、D129A、R127LS128QD129A を作製し、また同様にして、

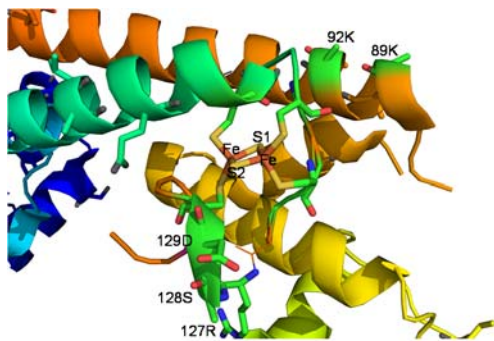


Fig. 1 Crystallographic structure of SoxR. Close-up of the region of iron-sulfur cluster. The structure was produced with PyMol using a structure from the Protein Data Bank (code 2ZHG(4)).

P. aeruginosa で対応する変異体を作製し(A87K、A90K、L125RQ126SA129D)、 O_2^- との反応速度を検討した。

Fig. 2 に *E.coli* SoxR の Fig. 3 に *Paeruginosa* SoxR およびそれぞれ変異体のパルス後の吸収変化と SOD の添加効果を示す。*E. coli* ではリジンをアラニンに置換すると SOD の添加効果が顕著

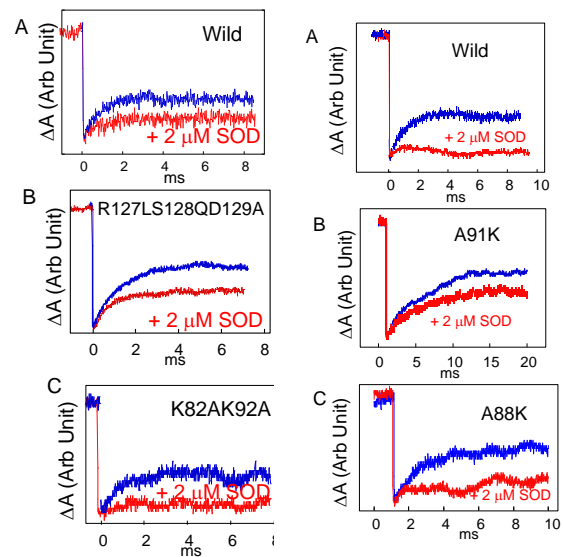


Fig. 2 Comparison of SOD effect on the oxidation of SoxR after pulse radiolysis of wild *E. coli* SoxR and their mutants.

Fig. 3 Comparison of SOD effect on the oxidation of SoxR after pulse radiolysis of wild *P. aeruginosa* SoxR and their mutants.

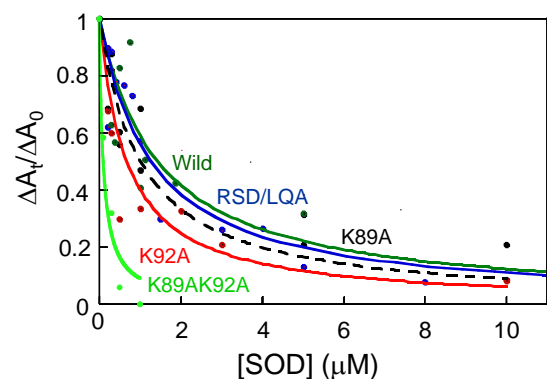


Fig. 3 Effect of SOD on the oxidation of *E. coli* SoxR and their mutants. The ratios of the increase in absorbance change (ΔA_t) to the total absorbance change (ΔA_0) were plotted against the concentration of SOD.

に見られるのに対して、RSD→LQA 変異体では wild とほとんど変わらなかった。一方 *P.aeruginosa* において逆にアラニンをリジンに変えると速度が増加することから、リジンが O_2^- の反応において重要な働きを示すことが明らかにされた。

References

- 1) E. Hidalgo and B. Demple, *EMBO J.* 13, 138 (1994)
- 2) M. Fujikawa, K. Kobayashi, and T. Kozawa, *J. Biol. Chem.* 287, 35702 (2012)
- 3) S. Watanabe, A. Kita, K. Kobayashi, Y. Takahashi, K. Miki, *Acta Crystallogr. Sect. F Struct. Biol. Cryst. Commun.* 62, 1275 (2006)
- 4) S. Watanabe, A. Kita, K. Kobayashi, and K. Miki, *Proc. Natl. Acad. Sci. USA* 105, 4121-4126

遺伝子損傷の分子機構 I—

テロメア配列を持つ Quadruplex におけるグアニンカチオンラジカルの脱プロトン過程

阪大産研量子ビーム物質科学

○小林一雄、古澤孝弘

Deprotonation of Guanine Cation Radical in G-Quadruplex DNA

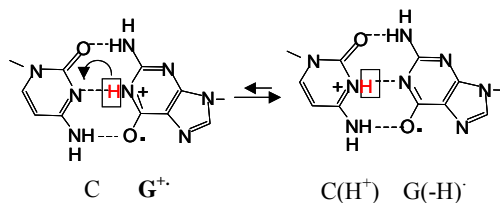
The Institute of Scientific and Industrial Research, Osaka University

Kazuo Kobayashi, Takahiro Kozawa

Prototropic equilibria in ionized DNA play an important role in charge transport and radiation damage of DNA. In this report, attempts were made to identify the favored site of deprotonation of the guanine cation radical ($G^{\bullet+}$) in telomeric DNA by pulse radiolysis and ESR studies. We examined one-electron oxidation of K^+ -containing quadruplex formed from 12-nucleotide repeat sequence of d(TAGGGTTAGGGT) (QG_4). The $G^{\bullet+}$ in QG_4 , produced by oxidation with $SO_4^{\bullet-}$, deprotonates to form the neutral G radical. Interestingly, the rate constant of deprotonation ($2.8 \times 10^6 s^{-1}$) is much slower than those of G-containing double-stranded oligonucleotide ($\sim 1 \times 10^7 s^{-1}$). In addition, in order to identify the protonation site in QC_4 , benchmark ESR spectra from 1-methyl dG and dG were employed to analyze the spectral data obtained in one-electron oxidized QC_4 . The ESR identification of G radical in QG_4 is supported by characteristic for $G(N1-H)^\bullet$ in model compounds.

はじめに

DNA 鎖中に生成したグアニン(G)カチオンラジカル($G^{\bullet+}$) は hole carrier として、また放射線損傷の重要な中間体のひとつとして考えられている。水溶液中 $G^{\bullet+}$ はその pK_a が 3.9 であり、直ちに N1 位のプロトンが脱離、G ラジカル ($G(-H)^\bullet$) が生成する¹⁾。それに対して、DNA 鎖中に生成した時、シトシン(C)と水素結合しているため、過渡的に生成する $G^{\bullet+}\cdot C$ は Scheme I に示すように平衡になっていることが予想されており、その後におきる hole 移動や酸化損傷に大いに影響を与えると考えられる。我々はパルスラ



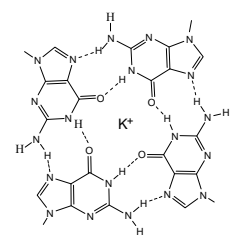
Scheme I

ジオリシス法により、グアニンの N1 位からの脱

プロトンと C3 位へのプロトン付加、さらに溶媒への脱離過程を明らかにした^{1,2)}。一方 ESR 法や理論的研究によりグアニンの 2 位からのプロトン解離を提唱している³⁻⁵⁾。

ヒト染色体末端にはテロメア配列 (5'-GGGTTA-3') と呼ばれる繰り返し配列を持っている。 K^+ 存在下で得られた結晶構造から、グアニン 4 量体が積み重なった構造 (Hoogsteen G · G pairing) を持つ。本研究では、テロメア配列におけるグアニンの酸化

損傷を調べることを目的として、パルスラジオリシス法による d(TAGGGTTAGGT) 配列 QG_4 の酸化挙動を調べた。 QC_4 では G の N1 の部位がカルボニル基と水素結合しており、その挙動は DNA 二重鎖中の G · C と大きく異なることが予想される。



QG_4

*K. Kobayashi, 06-6879-8502, kobayasi@sanken.osaka-u.ac.jp

実験

5'TAGGGTTAGGT3'配列のオリゴヌクレオチドを 50 mM KCl 存在下アニールした。パルスラジオリシス法は、10 mM の緩衝液を含む、K₂S₂O₈ 100 mM、QG₄1-5 mM、OH ラジカルスカベンジャーとして *tert*-butyl alcohol 0.1 M 含む pH 7.0 水溶液、アルゴン置換嫌気下で測定した。

ESR は Sevilla らの方法⁶⁾に従い行った。すなわち QG₄ 1 mM, 7.5 M LiCl, 0.2 M KCl 含む水溶液を 77 K にて凍結させγ線照射 (5 kGy)した。照射後 155 K 昇温し 20-30 min 放置した。この過程で、γ線照射により生成する Cl₂•⁻により DNA を酸化させ、生成する DNA の酸化物の ESR を 77 K にて測定した。

結果および考察

Fig. 1 にパルス後 625 nm の吸収変化を、Fig. 2 にパルス後観測される過渡スペクトルを示す。そのスペクトル変化から G⁺の脱プロトン化により

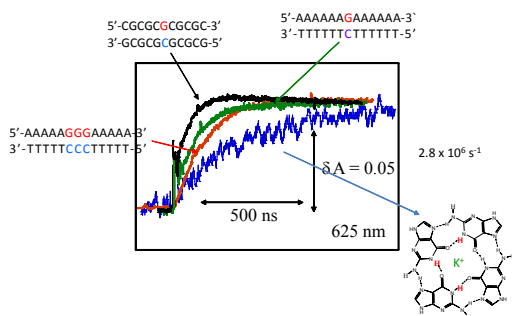


Fig. 1 Kinetics of absorbance changes at 625 nm after pulse radiolysis of various oligonucleotides and QG₄.

(G(-H⁺))が生成していることが確かめられた。同様の過程は Choi らにより報告されている⁷⁾。興味あることに、450 nm に観測される QG₄ の G⁺のスペクトルは二重らせん ODN と比較して長波長シフトしており、G のπスタックによる非局在化を反映していると思われる。また脱プロトン化の速度定数(2.8 x 10⁶ s⁻¹)は二重鎖 ODN と比較して小さい。

さらに脱プロトンがどの部位でおきるのかを確かめるために、Sevilla の方法^{4,5)}により ESR に

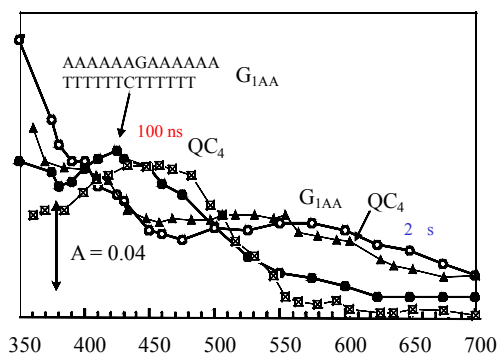


Fig. 2 Comparison of transient spectra of Gcation radical and G radical in oligonucleotide and QG₄

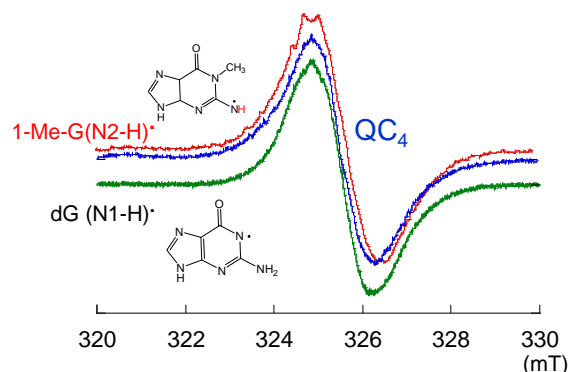


Fig. 3 ESR spectra obtained at 77 K for one electron oxidized form of dG, 1-Me-dG, and QC₄ in 7.5 M LiCl glasses in the presence of the electron scavenger K₂S₂O₈.

より確かめた。Fig.3 に QC₄ および N1 が脱プロトン化した dG および N2 位が脱プロトン化した 1-MedG のラジカルの ESR を示す。1-MedG では N2 位部位にラジカルが生成すると N による hyperfine が観測されるのに対して、明らかに QC₄ は dG と同じタイプであり、N1 位で脱プロトン化していると結論でき、Wu⁷⁾らの報告とは異なる。

References

- 1) K. Kobayashi and S. Tagawa, *J. Am. Chem. Soc.* 125, 10213 (2003)
- 2) K. Kobayashi, R. Yamagami, and S. Tagawa, *J. Phys. Chem. B* 112, 10752 (2008)
- 3) C. Chatgililoglu, C. Caminal, A. Altieri, G. C. Vougioukalakis, Q. G. Mulazzani, T. Gimisis, and M. Guerra, *J. Am. Chem. Soc.* 128, 13796 (2006)
- 4) A. Adhikary, A. Kumar, D. Becker, and M. D. Sevilla, *J. Phys. Chem. B* 110, 24171 (2006)
- 5) A. Adhikary, A. Kumar, S. A. Munafu, D. Khanduri, and M. D. Sevilla, *Phys. Chem. Chem. Phys.* 12, 5353 (2010)
- 6) J. Choi, J. Park, A. Tanaka, M. J. Park, Y. J. Jang, M. Fujitsuka, S. K. Kim, and T. Majima, *Angew. Chem.* 52, 1134 (2013)
- 7) L. Wu, K. Liu, J. Jie, D. Song, and H. Su, *J. Am. Chem. Soc.* 137, 259 (2015)

4-置換チオアニソールラジカルカチオンのパルスラジオリシス時間分解共鳴ラマン分光

産研量子ビーム科学研究施設^a・産研励起分子化学研究分野^b

藤乗幸子^{a*}、藤塚 守^b、真嶋哲朗^{b**}

The Time-resolved Resonance Raman Spectroscopy of 4-Substituted Thioanisole Radical Cations by during Pulse Radiolysis

Research Laboratory for Quantum Beam Science^a, Dept. of Molecular Excitation Chemistry^b

Sachiko Tojo^{a*}, Mamoru Fujitsuka^b, Tetsuro Majima^{b*}

The structures of 4-substituted thioanisole radical cations in aqueous solution were studied by the nanosecond time-resolved resonance Raman spectroscopy (TR³) combined with pulse radiolysis. The disappearance of C=C stretching vibration of benzene ring was observed for the TR³ spectrum of 4-(methylthio)toluene radical cation (MTT^{•+}), suggesting difference in the structures between MTT^{•+} and neutral 4-(methylthio)toluene. On the other hand, 4-(methylthio)anisole radical cation (MTA^{•+}) showed the disappearance of C_{Ph}-O stretching vibration at 1300 cm⁻¹ and the presence of the C=C stretching vibration, suggesting a different structure of MTT^{•+} from MTA^{•+}.

硫黄化合物は生物学的に重要な物質であり、その酸化還元反応中間体の構造を明らかにすることは生理学的機構解明において重要である。

昨年度に引き続き、Fig. 1に示すp-置換チオアニソールのラジカルカチオン(ArSCH₃^{•+})を放射線化学的酸化により生成させ、p-置換基がArSCH₃^{•+}の構造と反応性に及ぼす効果を明らかにした。

4-メチルチオアニソール(MTA)水溶液中の室温パルスラジオリシスにおいて、電子線照射50 ns後、580 nmに一電子酸化体MTAラジカルカチオン(MTA^{•+})の過渡吸収(TA)が観測された(Fig. 2)。MTAの高濃度50 mMベンズニトリル溶液のパルスラジオリシスにおいてもMTA^{•+}のみが観測された。4-メチルチオトルエン(MTT)のラジカルカチオン(MTT^{•+})で生成される2種のダイマーラジカルカチオンσ-, π-(ArSCH₃)₂^{•+}は¹⁾、MTA^{•+}では生成しなかった。MTT^{•+}とMTA^{•+}の時間分解振動構造を明らかにするためにMTAとMTT水溶液電子線照射後に532 nmレーザーを任意の遅延時間に照射しArSCH₃^{•+}の過渡共鳴ラマン(TR)を測定した。MTT^{•+}のTRでは1601 cm⁻¹(C=C stretching)の消失と1463

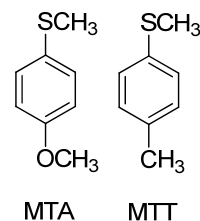


Fig. 1. Molecular structures of 4-substituted thioanisole (ArSCH₃) used in this study.

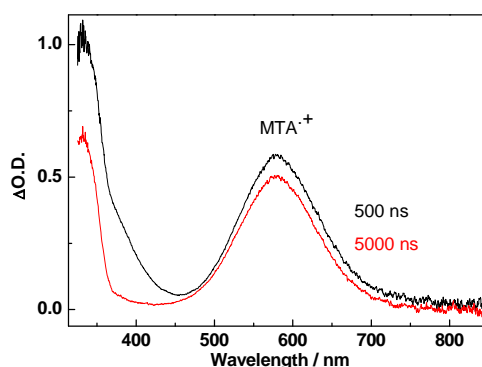


Fig. 2. TA spectra observed at 500 (black) and 5000 (red) ns after an electron pulse during the pulse radiolysis of MTA 1 mM with in N₂O-saturated aqueous solution (pH 7) containing NaBr (100 mM).

cm⁻¹ (CH₃ bending of SCH₃)の生成が観測された(Fig. 3A)。またMTT^{•+}の振動構造はMTTのそれとは大きく異なった(Fig. 3C)。観測されたMTT^{•+}の振動構造は計算結果と一致した(Fig. 3B)。

* S. Tojo, 06-6879-8511, tojo@sanken.osaka-u.ac.jp, **T. Majima, 06-6879-8495, majima@sanken.osaka-u.ac.jp

同様にMTA^{•+}のTRを測定した。MTT^{•+}のTRとは異なりC=C stretchingは保持され、一方1300 cm⁻¹のC_{Ar}-O stretchingが消失した(Fig. 4A)。MTA^{•+}の振動構造はMTA(Fig. 4C)のそれと類似した。

理論計算から得られたArSCH₃^{•+}の最適化構造はいずれもC-S結合長が短くなり、-SCH₃基のベンゼン環に対する平面性が増加した。振動構造と電荷密度計算の結果から、MTT^{•+}はS上の正電荷が増加したセミキノイド型、MTA^{•+}は正電荷が非局在化したキノイド型構造であることが示唆された。

セミキノイド型MTT^{•+}ではS上の正電荷の増大がσ-(MTT)₂^{•+}、Sの非結合電子とベンゼン環のπ電子との相互作用がSも含めたπ-(MTT)₂^{•+}の生成に影響していることが示唆された(Scheme 1)。

一方MTA^{•+}はいずれのダイマージカルカチオンも生成しない。MTAはキノイド型により、S上正電荷はより小さくなりσ-(MTA)₂^{•+}を、また正電荷の非局在化がπ-(MTA)₂^{•+}の生成を抑制していることが示唆された。

パルスラジオリシス時間分解共鳴ラマン分光によりArSCH₃^{•+}の振動構造がとラジカルカチオンの二量化に大きく影響することが明らかとなった。今後σおよびπ-ダイマージカルカチオンにおける三電子結合やπ電子相互作用状態における分子振動構造を明らかにしていきたい。

Scheme 1. Dimerization of ArSCH₃^{•+}

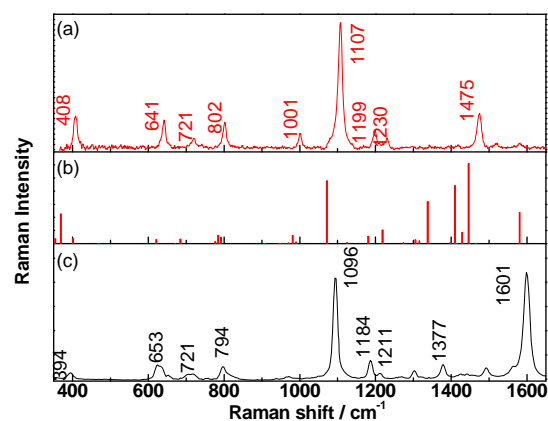
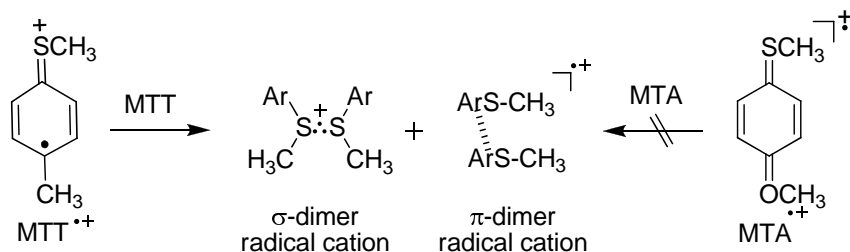


Fig. 3. Comparison of (a) TR³ spectrum observed at 500 ns after an 8-ns electron pulse during the pulse radiolysis of MTT (1 mM) in N₂O-saturated aqueous solution containing NaBr (100 mM) excited at 532 nm with (b) the calculated Raman peaks of MTT^{•+} and (c) steady-state Raman spectrum observed for MTT in DCE excited at 355 nm.

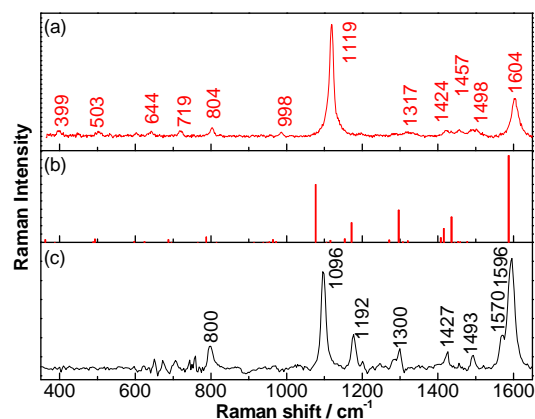


Fig. 4. Comparison of (a) TR³ spectrum observed at 500 ns excited at 532 nm after an 8-ns electron pulse during the pulse radiolysis of MTA (1 mM) in N₂O-saturated aqueous solution containing NaBr (100 mM) with (b) the calculated Raman peaks of MTA^{•+} and (c) steady-state Raman spectrum observed for MTA excited at 355 nm in 1,2-dichloroethane (DCE).

Reference

- 1) 藤乗幸子, 藤塚守, 真嶋哲朗, 量子ビーム科学研究施設年度報告書 (2014) 33.

陽電子を粘土鉱物の空隙評価

産研量子ビーム科学研究施設

菅田義英

Evaluation of the space in clay minerals using positron annihilation spectroscopy

RLQBS, SANKEN

Yoshihide Honda

Information of the annihilation site of positron/positronium in clay minerals is very important to evaluate the trapping sites of cations there by using positron annihilation spectroscopy (PAS). Several montmorillonites which are well-characterized by authorities, are investigated by X-ray diffraction (XRD) and PAS. The distance between cyclic sheet-units in clay minerals was evaluated by XRD. The results of lifetime measurements of positron and coincidence Doppler broadening measurements suggested that the dominant annihilation would be the free annihilation in octahedral sheets without forming positronium, and the remaining annihilation after forming ortho-positronium would occur in the space relating to hexagonal spaces in the sheets.

粘土鉱物の違いによる捕捉イオン種の吸着脱離効果の違いを調べることは、放射性物質の除染だけでなくフィルターとしての性能評価という点でも重要である。一般に粘土鉱物は荷数の違うイオンによる同形置換が起き、負の電荷となっているため、層間にカチオンを含んでいるものが多い。捕捉されたカチオンにより層間距離が変わり、カチオンが脱離されにくくなることもあるが、パーミキュライトにおけるセシウムイオンのように特定欠陥にセシウムイオンが捕捉され脱離しなくなることも報告されている。このような欠陥は通常のX線回折や電子顕微鏡では検出されにくい。他のカチオンの吸着脱離を考える際、欠陥サイズを含め考察することが重要だと考えている。

陽電子消滅法で粘土鉱物の欠陥サイズを評価し、カチオンの吸着脱離との相関を調べるためには、陽電子

がどこの空間で消滅しているのかを先ず調べる必要がある。今年度は基礎データがある程度そろっている粘土鉱物のモンモリロナイトで陽電子消滅過程を調べた。アメリカの The Clay Minerals Society より供給されている 4 種類の試料 (表 1 左側 4 種類) と日本粘土学会から配布される標準試料 2 種類 (表 1 右側 2 種類) に対し計測を行った。これらの試料の詳細な情報は夫々のホームページに記載されている。モンモリロナイトは、Al を 8 個の酸素原子またはOH基が取り囲んでいる 8 面体シートを SiO₄ から成る 4 面体シートが挟んでいる構造を基本ユニットとしており、2 : 1 鉱物に分類されている。この 4 面体の Si が Al と

表 1 各試料に対する面間距離の計測結果

	MCAW(STx-1b)	MCAC(Saz-2)	MNA(Swy-2)	M(Sca-3)	MM(三川)	MG(月布)
陽電子消滅法で評価した空孔直径	5.87Å (5%)	4.75Å(7%)	4.62Å (1.4%)	5.1Å(8%)	5.4Å(3%)	4.87Å(1.6%)
ユニット間距離に相当	15.49Å	15.62Å	15.17Å	15.65Å	14.62Å	12.70Å
CDBで評価したピーキングの度合い	1	4	6	2	3	5
電荷(O:八面体、T:四面体)	-0.68(O) 0(T)	-1.08(O) 0(T)	-0.53(O) -0.02(T)	-1.29(O) -0.19(T)		
Cation Exchange Capacity	84.4meq/100g	120 meq/100g	76.4 meq/100g			

置換することで負電荷が過剰になり、さらに 8 面体シートも Al が Mg などの不純物原子と同形置換することで負電荷過剰となり、結果的に 4 面体シート間に Ca, K, Na などの不純物カチオンが捕捉された層状構造となっている。

X線回折 (RIGAKU: SmartLab) から 2 : 1 鉱物のユニット自身を含むユニット間距離に対応すると考えられるピークはアメリカの試料ではほぼ同じ 15 Å であったが、日本の試料では 14.6 Å, 12.7 Å と特に月布の試料で間隔小さかった (表 1)。15 Å は相対湿度 60 % 程度の時の値であることが知られている。このような間隔では 4 面体間にあるカチオンは水和しているものが多いと考えられており、ユニット同士は水素結合で結びついている。アメリカの試料の層電荷の荷数は表 1 に示すようにわかっており、負電荷が高いほど層間距離も大きくなっている。このピークを除いた他のピークは層に含まれる化学成分の結晶構造を反映していると考えられる。高純度 Ge 半導体検出器を試料に対し対向させて配置し 2 光子消滅の消滅 γ 線だけを観測することで、光電ピークに現れる消滅相手電子の運動量を精度良く測定する手法 (CDB 法) で測定した。モンモリ

ロナイトにおける消滅 γ 線の光電ピークとイライトのそれとの比のエネルギー分布 (図では電子運動量に換算) を図 1 に示す。モンモリロナイト間で差が見られたが分布の違いはほぼ単調であった。表 1 にドップラー効果が小さかった (ピーキングしていた) 順を示してある。測定した試料では陽電子消滅はオルソポジトロニウム (σ Ps) の生成量を考えると、ほとんど自由消滅によると考えられる。水素結合に関係する低エネルギー電子との消滅が主であれば負電荷数の大きい順、あるいは 4 面体の間隔が広い順になることが想像されたがそうはならなかった。これは八面体層での電荷量が大きいため、陽電子はここに引き寄せられここで自由消滅しているからだと考えられる。 σ Ps の生成量は多くても 8%程度と少なく、MNA ではほとんど生成されなかったが、生成量は 4 面体間隔の広い順にほぼなっていた。 σ Ps の寿命から評価される空隙のサイズは 5 Å 前後であり、層内に存在する六員環のサイズともほぼ一致している。ユニット間距離が大きくなるにつれ σ Ps の生成量は増加する傾向がみられたことから、 σ Ps は四面体の層間で生成されこの近傍で捕捉されている可能性がある。また、

σ Ps の寿命から評価される空隙径は層内に存在する六員環の大きさにほぼ相当している。空隙径と CDB のピーキングの程度にはある程度相関があるように見える。

今回はモンモリロナイトを中心に解析を行ったが、今後イライト、カオリナイト等についても解析を行い、粘土鉱物内で陽電子消滅法ではどこの空隙を評価していることになるのかを明らかにしていきたい。

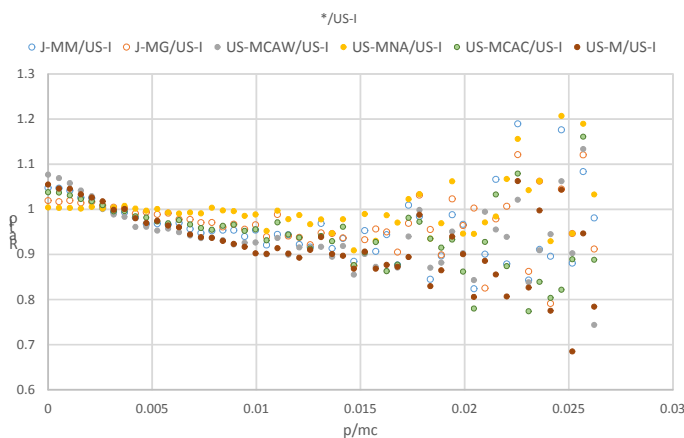


図 1 イライトに対する各モンモリロナイトの光電ピーク比の運動量依存性

THF 溶媒中での金属ナノ粒子の放射線誘起還元

産研量子ビーム物質科学研究分野

山本洋揮、古澤孝弘

Radiation-induced synthesis of metal nanoparticles in THF solvent

Dept. of Beam Materials Science, The Institute of Scientific and Industrial Research, Osaka University

Hiroki Yamamoto, Takahiro Kozawa

Silver nanoparticles have been produced in THF in one step by using the gamma-irradiation of Ag^+ solution and stabilization with the polymer PMMA. The silver nanoparticles have been characterized by their plasmon absorption band, high resolution transmission electron microscopy and energy dispersive spectrometry.

金属ナノ粒子は量子サイズ効果によってバルク材料とは異なる化学的性質・物理的性質を示すことからナノテクノロジーの分野での新規材料として脚光を浴びている。現在、金属ナノ粒子や半導体ナノ粒子はディスプレイ、LED などの電子材料をはじめ、太陽電池の触媒、医薬分野での蛍光マーカー、色材、光リミッタなど幅広い応用が期待されている。

水溶液中またはアルコール溶液中での金属ナノ粒子の作製の報告がなされており、その形成メカニズムも明らかにされている。通常、ポリマーは過度のクラスター成長を防ぐために使用され、イソプロピルアルコールは酸化を引き起こすラジカルの反応を抑制するために添加される。以前の研究より、有機溶媒を水溶液の代わりに使用すると、ナノ粒子の安定性や化学的反応性が変化することが明らかになっている。非水溶性溶媒での金属ナノ粒子が必要なとき、一般的に水溶液中で金属ナノ粒子を合成した後、最終的な溶媒に置換する。本研究の目的は還元剤を加えず、室温で極性の低い溶媒中において一段階で金属ナノ粒子を合成し、それを物性評価し、水や他の極性溶媒において放射線で作られた金属ナノ粒子と比較することである。そこで、ポリマーが溶けやすい THF を溶液に選び、数種類のポリマーを溶かしてクラスター安定性へのポリマー依存性、線量効果、イソプロパノール付加の効果、クラスター

サイズを調べることで THF 溶液中での形成メカニズムを検討した。

本研究では、ポリマーとしてポリヒドロキシステレン(PHS)とポリスチレン(PS)とポリメチルメタクリレート(PMMA)とn-イソプロピルアクリルアミド(NIPAM)を用いた。金属イオンには過塩素酸銀(AgClO_4)の金属塩を用いた。それらを THF 溶液に溶かした。また、場合によってはこの溶液にイソプロピルアルコール付加してその効果を調べた。この調整した溶液をガンマ線で照射して銀ナノ粒子の作製を試みた。その金属ナノ粒子の分析には、紫外・可視吸収スペクトルと透過型電子顕微鏡(TEM)を用いて行った。

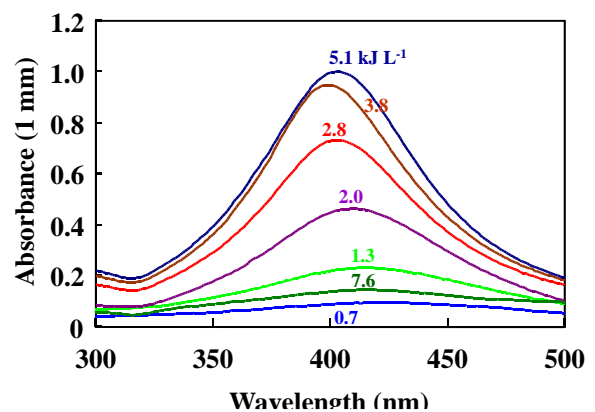


図 1. 0.025 M の PMMA と 10^{-3} M の AgClO_4 を溶かした THF 溶液の光学吸収スペクトル

0.2 M の 2-プロパノールがある場合とない場合の 0.025 M の PMMA と 10^{-3} M の AgClO_4 を溶かした THF 溶液に線量を増加させながら線照射した。図 1 は 0.025 M の PMMA と 10^{-3} M の AgClO_4

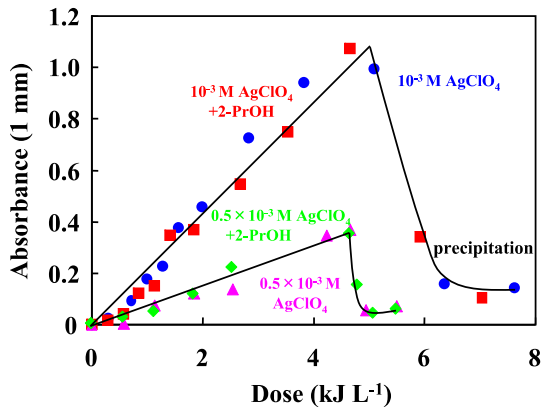


図 2. 400nm の吸光度対 0.025 M の PMMA と 10^{-3} M の AgClO_4 を溶かした THF 溶液における吸収線量

を溶かした THF 溶液に線量を増加させながら γ 線照射後の光学吸収スペクトルである。400 nm に銀ナノ粒子の表面プラズモンバンドが観察された。図 2 に示されるように、 1 kJ L^{-1} の線量まで誘導時間の後、吸収線量が増加するにつれて吸光度が増加した。しかしながら、 5.1 kJ L^{-1} 以上で吸光度は突然減少し、溶液は無色になった。ポリマーによってもはや銀ナノ粒子が安定化されなくなり、それらは沈殿してしまう。もし最も高い吸光度が全部の銀イオンの放射線還元が起こったときに対応すると仮定すると、原子あたりの銀ナノ粒子の吸光定数は $\epsilon_{\text{Ag(n)}} = 1.05 \times 10^4 \text{ L mol}^{-1} \text{ cm}^{-1}$ である。 5.1 kJ L^{-1} 以下の吸光度の線量依存性から、銀原子における平均放射線収率 $G_{\text{Ag(n)}} = 1.9 \times 10^{-7} \text{ mol J}^{-1}$ と見積もることができる。類似条件下で銀イオンがより低い濃度 $[\text{Ag}^+] = 5 \times 10^{-4} \text{ mol L}^{-1}$ の場合、吸光度の増加は最初ほとんど線形であったが、収率は $G_{\text{Ag(n)}} = 1.2 \times 10^{-7} \text{ mol J}^{-1}$ であった。これらの結果から全体が還元されるのは 4.2 kJ L^{-1} であることがわかった。また、0.2 M の 2-プロパノールを THF に添加しても特別な効果が観察されなかった。それゆえ、2-プロパノールの反応は THF 中では有効ではないことが明らかになった。

図 3 は 4.2 kJ L^{-1} で得られた銀ナノ粒子の HRTEM 画像である。銀ナノ粒子の直径はおよそ

5 nm で、111 面で 0.24 nm の格子定数であった。この結果より、PMMA 中で安定な銀ナノ粒子が合成されていることが明らかになった。

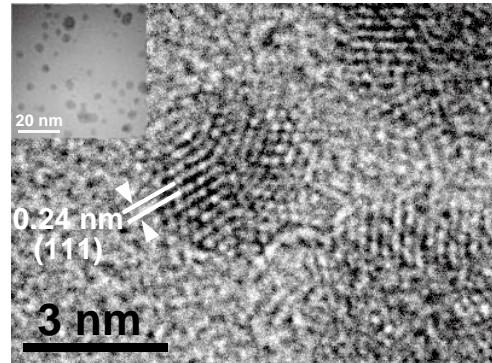


図 3. 4.2 kJ L^{-1} で得られた銀ナノ粒子の HRTEM 画像

ドデカン中の放射線化学初期過程と放射線分解

産研極限ナノファブリケーション研究分野^a、産研ナノテクノロジー設備供用拠点^b、

近藤孝文^{a*}、西井聡志^a、神戸正雄^a、法澤公寛^b、菅 晃一^a、楊 金峰^a、田川精一^a、吉田陽一^a

Development of UV femtosecond pulse radiolysis and observation of alkyl radical in dodecane

Dept. of Advanced Nanofabrication^a, Nanotechnology Open Facilities^b,

Takafumi Kondoh^{a*}, Satoshi Nishii^a, Masao Gohdo^a, Kimihiro Norizawa^b,

Koichi Kan^a, Jinfeng Yang^a, Seiichi Tagawa^a, Yoichi Yoshida^a

In order to understand the relationship between the initial process of radiation induced chemical reactions and radiolysis in *n*-dodecane which is a typical non-polar liquids, neat dodecane and biphenyl-dodecane solution were examined by the femtosecond electron pulse radiolysis. It was found that the initial-yields of observable electron are reduced and biphenyl radical anion were generated very fast with the reaction rate constant of $2 \times 10^{12} \text{ M}^{-1} \text{ s}^{-1}$. These phenomena means ultrafast mobile electron attach to the biphenyl in *n*-dodecane. And it was found that alkyl radicals produced by radiolysis are formed very quickly from the excited radical cation.

はじめに

ドデカンは、飽和炭化水素の一種であり、核燃料再処理における抽出剤溶媒に用いられているので、放射線分解を理解する必要がある。また、最も単純なポリエチレンモデル化合物として考えれば、放射線劣化や放射線分解によって生成するアルキルラジカルは、架橋点でありその生成過程を解明することが重要である。これまで、飽和炭化水素の分解過程は、主に紫外光励起により研究され、高励起状態から水素原子脱離、低励起状態から水素分子の放出が報告されてきた¹⁾しかしながら飽和炭化水素の放射線分解初期過程は、パルスラジオリシスの時間分解能の不足からいまだ明らかにされていない。パルスラジオリシスは、パルス放射線を照射し、過渡吸収により活性種反応を直接観測する手法である。田川らは、ピコ秒電子線パルスラジオリシスにより、シクロヘキサン中のアルキルラジカルの過渡吸収時間挙動を報告した。当時の時間分解能の時間以内にアルキルラジカルは生成し、その後ジェミネートイオン再結合に対応した生成は見られなかった²⁾。一方、近年のフェム

ト秒パルスラジオリシスを用いた初期過程の研究は、最初のジェミネートイオンが、短寿命の励起ラジカルカチオンと電子であることを報告した³⁾。本研究の目的は、ドデカン中でイオン化から始まる放射線化学初期過程、すなわち電子とラジカルカチオンのジェミネートイオン再結合や、溶質がある場合の電荷移動反応と、分解して生成物に至るアルキルラジカルの生成過程の関係を明らかにすることである。

実験

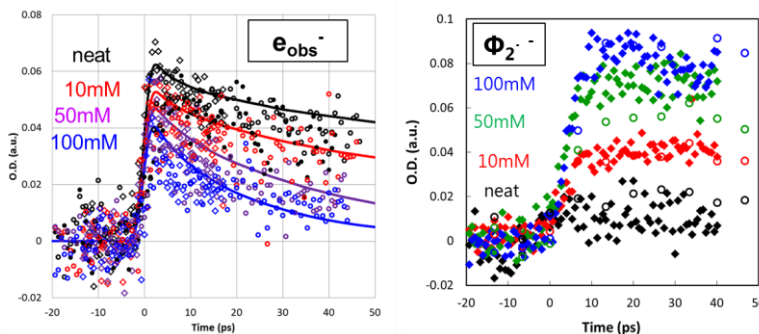
フェムト秒パルスラジオリシス実験は、フォトカソード高周波電子銃加速器により 1 nC, 500 fs, 35 MeV のパルス電子線を発生して試料に照射し、フェムト秒レーザー光を分析光に用いて、バンドパルフィルタにより分光してフォトダイオードにより検出した。試料はドデカンを石英セルに計量し、Ar により脱酸素した。

結果と考察

フェムト秒パルスラジオリシスを用いて波長

* T. Kondoh, 06-6879-4285, t-kondo@sanken.osaka-u.ac.jp

Fig.1 Ultrafast electron transfer to biphenyl: kinetic trace of electron (left) and biphenyl radical anion (right) with increasing concentration of biphenyl



1200 nm で測定した電子の時間挙動のビフェニル濃度依存性を Fig.1 左に示した。波長 415 nm で測定したビフェニルラジカルアニオンの過渡吸収のビフェニル濃度依存性を Fig.1 右側に示した。電子は、減衰速度の増加とともに、初期収量の減少が観測された。一方で、ビフェニルラジカルアニオンは、非常に高速に生成された。この事は、観測している電子 (e_{obs}^-) に前駆体が存在し、更にジェミネートイオン再結合もするという電子の状態変化を考慮し、ビフェニルへの電荷移動速度の濃度依存性を考察したところ、反応速度定数を $2 \times 10^{12} \text{ M}^{-1} \text{ s}^{-1}$ と見積もることができた。この前駆体電子は、擬自由電子等の高移動度で拡散する活性種と考えられる。観測している活性種がビフェニルらにかるアニオンであることを確認するために、ビフェニルドデカン溶液の 415 nm 近傍の過渡吸収時間挙動を測定した。その結果得られたピコ秒時間分解スペクトルを Fig.2 に示す。10 ps の時間分解スペクトルはビフェニルラジカルアニオンを示している。ドデカン中の過剰電子は $2 \times 10^{12} \text{ M}^{-1} \text{ s}^{-1}$ の速度でビフェニルに付着しビフェニルラジカルアニオンを生成することがわかった。この事は非常に高速に移動する電子がドデ

カン中に存在することを示唆している。一方、電子のジェミネートペアであるラジカルカチオンと分解で生成するアルキルラジカルがほぼ同じ生成時定数 3 ps を持つことがわかった。このことは、同じ前駆体である励起ラジカルカチオンからの生成を強く示唆している。前駆体として提案している励起ラジカルカチオンはいまだ観測されておらず、ラジカルカチオンの光再励起により励起ラジカルカチオンを生成し、アルキルラジカルの挙動を調べる実験を行っている。

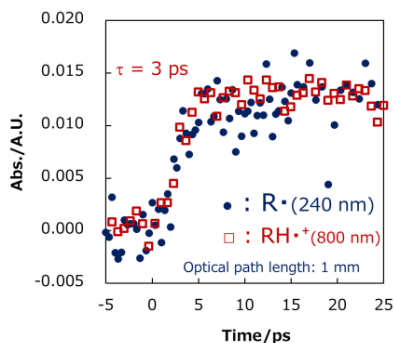


Fig.3 : Time course of alkyl radical and dodecane radical cation

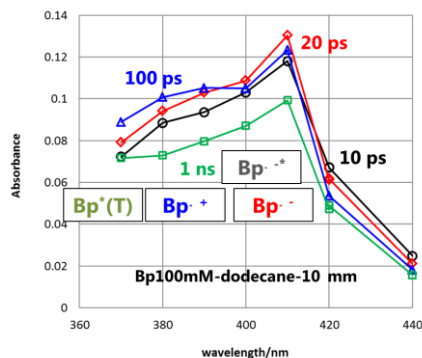


Fig.2 Picosecond transient absorption spectrum of 100mM biphenyl dodecane solution

謝辞

本研究は文部科学省科研費24710094, 21226022により助成されました。

Reference

- 1) P. Ausloos et al., J. Phys. Chem., 85, 2322 (1981),
- 2) S. Tagawa et al., Radiat. Phys. Chem., 34, 503 (1989),
- 3) T. Kondoh et al., Radiat. Phys. Chem. 80 (2011)286-290.

フェムト秒電子ビームのコヒーレント遷移放射測定

産研極限ナノファブリケーション研究分野

菅晃一*、楊金峰、近藤孝文、神戸正雄、野澤一太、吉田陽一**

Measurement of coherent transition radiation from femtosecond electron beam

Dept. of Advanced Nanofabrication

K. Kan*, J. Yang, T. Kondoh, M. Gohdo, I. Nozawa, Y. Yoshida**

Ultrashort electron beams with pulse durations of femtoseconds and picoseconds have been investigated to improve a time resolution of time-resolved measurements. In this study, ultrashort electron beams were generated using an S-band laser photocathode RF (Radio Frequency) gun linear accelerator (linac) and a magnetic bunch compressor. The bunch length measurement was also carried out by analyzing interferograms of coherent transition radiation (CTR) emitted from the electron bunches.

フェムト秒・ピコ秒領域の超短パルス電子ビームは、自由電子レーザー、レーザーコンプトンX線発生、パルスラジオリシス[1,2]等の加速器物理、物理化学の研究に応用されている。そのため、超短パルス電子ビーム発生は、高品質な光源開発や時間分解計測における時間分解能向上のために不可欠となっている。これまでに阪大産研では、フェムト秒電子ビームとフェムト秒レーザーを用いて、フェムト秒時間分解能を有するパルスラジオリシス[1]が開発されている。一方では、フェムト秒電子銃と磁気パルス圧縮により超短パルス電子ビームを発生し、マイケルソン干渉計を用いて20フェムト秒の電子ビーム発生を行ってきた[3]。しかし、これまでの電子ビーム診断では、コヒーレント遷移放射(CTR, coherent transition radiation)によるテラヘルツ波の周波数領域は考慮しているが、強度(パルスあたりのエネルギー)は考慮されていなかった。そこで、本研究では、CTRの強度を考慮した周波数領域測定の可能性について研究した。

フェムト秒電子ビームからのCTRを測定するために、フォトカソードRF電子銃ライナック[1,3,4]を用いてフェムト秒電子ビームの発生を行った。加速器は、フォトカソードRF電子銃、加速管、磁気パルス圧縮器により構成される。カソード駆動用のNd:YLFピコ秒レーザーからの紫外光パルスをフォトカソードRF電子銃に入射し、光電子により発生した電子ビームを用いた。電子銃で発生した電子ビームを加速管によりエネルギー変調し、磁気パルス圧縮器により電子ビームの

パルス圧縮を行った。圧縮されたフェムト秒電子ビーム(エネルギー:35 MeV)をチタン箔製のビーム窓から測定用真空チャンバーに導き、CTRの測定を行った。

電子ビーム計測では、電子ビームが平面鏡の境界条件で発生するCTRをコリメートし、マイケルソン干渉計[3,4,5]へ導いた。干渉計内で、入射電磁波はビームスプリッタにより分岐され、片方は移動鏡、もう片方は固定鏡により反射され、赤外線検出器で合流した。赤外線検出器には、液体ヘリウム冷却Siボロメータ(Infrared Laboratories Inc.)を用いた。ビームスプリッタは、反射・透過率が検出効率に影響するため、遠赤外～中赤外領域において比較的高い反射・透過率を有する高抵抗Si基板を用いた。測定では、移動鏡の距離を変化させインターフェログラムの計測を行った。さらに、インターフェログラムの高速フーリエ変換により周波数スペクトルを解析した。測定系の感度(検出する光エネルギーあたりの出力電圧)を算出するために、光チョッパーにより変調された赤外光源(IRS, IRS-001C, IR System Co.)の測定も行った。赤外光源の表面温度は850-950°C(1123-1223 K)である。さらに、黒体輻射を模擬するために、黒体スプレー(JSC-3, Japan Sensor Corp.)を光源表面に塗布した。

本報告では、下記の数式を用いて解析を行った。

$$I(\nu, T) = \frac{2h\nu^3}{c^2} \frac{1}{e^{h\nu/kT} - 1} [\text{J/s/m}^2/\text{sr/Hz}] \quad (1)$$

$$\frac{d^2 P_0'}{d\Omega d\lambda} = \frac{2\alpha\beta^2 n \sin^2 \theta}{\pi^2 \lambda (1 - \beta^2 n^2 \cos^2 \theta)} \left(1 - \cos \frac{2\pi L}{L_f} \right) [\text{ph/sr/m}] \quad (2)$$

* K. Kan, 06-6879-4285, koichi81@sanken.osaka-u.ac.jp; **Y. Yoshida, 06-6879-4284, yoshida@sanken.osaka-u.ac.jp

$$L_f = \frac{\beta\lambda}{|1 - \beta n \cos \theta|} [\text{m}] \quad (3)$$

$$\frac{d^2 E_0^T}{d\Omega dv} = \frac{2h\alpha\beta^2 n \sin^2 \theta}{\pi^2 (1 - \beta^2 n^2 \cos^2 \theta)} \left(1 - \cos \frac{2\pi L}{L_f} \right) [\text{J/sr/Hz}] \quad (4)$$

$$\frac{dE_{CTR}^T}{dv} = \left\{ N + \exp(-2\pi\sigma\nu)^2 N^2 \right\} \int_0^{0.026} \frac{d^2 E_0^T}{d\Omega dv} d\Omega [\text{J/Hz}] \quad (5)$$

式(1)は、黒体温度 T [K] の黒体が放射する(プランク放射)スペクトルである。式(2)と式(3)は、それぞれ、一電子のTR(遷移放射)の単位波長・立体角あたりの発生光子数とformation zoneである[6]。式(4)は、波長・周波数の関係式を用いた置換と式(2)から導かれる、一電子の単位周波数・立体角あたりの発生エネルギーである。式(5)は、コヒーレント放射を考慮し、電子ビームパルス幅が σ [s] の場合の、本測定系の26 mradまでの放射角のCTR検出を仮定して計算される、CTRの単位周波数あたりのエネルギーを示す。

図1に、マイケルソン干渉計を用いて赤外光源のインターフェログラム測定により得られた、周波数スペクトルと感度を示す。ボロメータは、検出素子の upstream に2種類のフィルター(Filter 1: 5/10 μm ダイヤモンドを持つ白ポリエチレン、Filter 2: ガーネット粉を持つ結晶ウェッジ結晶クォーツ)を切り替えて、測定を行った。図1(a)に、それぞれのフィルター条件で検出された周波数スペクトルを示す。式(1)により得られる、黒体温度1173 Kの場合の、プランク放射スペクトルを比較のために示す。それぞれのフィルターを用いた場合の検出帯域は <18 THz、<9 THz と得られた(赤外光源測定で得られたスペクトルの最大値の10%強度)。また、電子ビーム測定は10Hzの光を計測するため、赤外光源測定でのチョッピング周波数(1 kHz)を考慮した。その結果、図2(b)に、電子ビーム測定で想定される感度 $S_{10\text{Hz}}$ を見積もった。いずれのフィルター条件でも、通過帯域での感度の最大値は $3 \sim 4 \times 10^5$ [V/(J/s)] と得られた。つまり、DC的に $1 \text{ W} = 1 \text{ J/s}$ の光をボロメータで検出した場合、DC的に $3 \sim 4 \times 10^5 \text{ V}$ の電圧を出力することを意味する。低周波領域での感度の増加は、0除算が原因と考えられる。

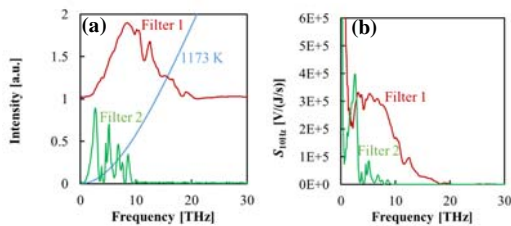


図1. 赤外光源測定により得られた(a)周波数スペクトルと(b)感度

図2に、CTR測定インターフェログラムと感度を考慮して得られた周波数スペクトルを示す。電子ビームの加速管における加速位相は97.5度、電子ビームの電荷量は、0.92 nC/pulseであった。回折限界等を考慮するモデル[7]による最小二乗法のフィッティングでは、ボロメータのフィルター条件によらず約100 fsの電子ビームパルス幅と得られた。図2(b)に、図1(b)で得られたスペクトルの感度を考慮して、1つのCTRパルスの単位周波数あたりのエネルギーを示す。理由は不明であるが、フィルター条件を変化させた場合、同じビームを計測したが算出エネルギーが異なってしまった。実線の曲線は、式(5)を用いて、電荷量0.92 nC、パルス幅170 fsのシミュレーションにより得たスペクトルを示し、Filter 2を用いた場合の測定結果と似たスペクトルの計算結果となった。また、0.4-2 THzの積分値により、CTRのエネルギーは15~210 nJ/pulseと得られた。今後、CTRのパルスエネルギー測定を行うと同時に、時間領域測定[5]への展開も行う。

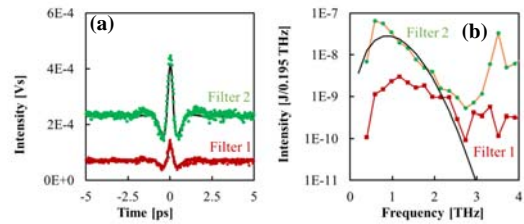


図2. (a)CTR測定インターフェログラムと(b)感度を考慮して得られた周波数スペクトル

マイケルソン干渉計を用いたフェムト秒電子ビームのCTRの計測において、周波数分解したエネルギー測定の研究を行っている。CTRのエネルギーは15~210 nJ/pulseと得られた。今後、CTRのエネルギー校正および時間領域測定等を行う予定である。

本研究は、科研費(25870404, 26249146, 15H05565)により支援を受けました。

Reference

- 1) J. Yang et al., Nucl. Instrum. Meth. A 637, S24 (2011).
- 2) T. Kondoh et al., Radiat. Phys. Chem. 84, 30 (2013).
- 3) I. Nozawa et al., Phys. Rev. ST Accel. Beams 17, 072803 (2014).
- 4) K. Kan et al., Electron. Comm. Jpn. 99, 22 (2016).
- 5) K. Kan et al., Appl. Phys. Lett. 102, 221118 (2013).
- 6) T. Takahashi et al., Phys. Rev. E 50, 4041 (1994).
- 7) A. Murokh et al., Nucl. Instrum. Meth. A 410, 452 (1998).

金属回折格子を用いたスミス・パーセル放射の研究

産研極限ナノファブリケーション研究分野^a、三重大学工学研究科^b

菅見一^{*a}、松井龍之介^b、楊金峰^a、近藤孝文^a、神戸正雄^a、吉田陽一^{**a}

Smith-Purcell radiation using metallic grating

Dept. of Advanced Nanofabrication^a, Graduate School of Engineering, Mie University^b

K. Kan^{*a}, T. Matsui, J. Yang^a, T. Kondoh^a, M. Gohdo^a, Y. Yoshida^{**a}

Ultrashort, e.g., picosecond or femtosecond, electron beams are useful for electro-magnetic radiation production in terahertz (THz) range. THz radiation of the order on 0.1 THz based on Smith-Purcell radiation (SPR) using a metallic grating was measured. Electron beams generated by a photocathode radio-frequency (RF) gun linac were used for the SPR measurement.

フェムト秒・ピコ秒領域の超短パルス電子ビームは、自由電子レーザー、レーザーコンプトンX線発生、パルスラジオリシス[1,2]等の加速器物理、物理化学の研究に応用されている。同時に、より短いパルス幅を持つ電子ビームは、電子ビームの分布をフーリエ変換[3]することにより得られるバンチ形状因子の観点から、高周波・高強度のテラヘルツ波を生成できることがコヒーレント放射として知られている。そこで、本研究では、小型電子ビーム装置によるテラヘルツ光源として期待されているスミス・パーセル放射 (SPR, Smith-Purcell radiation) [4]の研究を行った。

実験では、フォトカソードRF電子銃加速器からの電子ビーム[1,5]とアルミ製の金属回折格子を用いた。また、回折格子の周期長2 mm、電子ビームエネルギー:27 MeV ($\beta=0.9998$)として解析を行った。回折格子の形状は、矩形の周期構造であり、溝の長さ:1 mm、溝の深さ:1 mmであった。本研究では、金属回折格子の近傍を電子ビームが通過する際に電子ビーム軌道となす角、放射角 θ に放射されるテラヘルツ波を、移動・回転する平面鏡により干渉計へ導き、マイケルソン干渉計[5,6]により分光した。

図1に、SPRにより得られるテラヘルツ波に対する放射角の影響を示す。図1(a)に、放射角 θ が変化した場合のインターフェログラムを示す。ここでは、電荷量:95 pCの圧縮されたフェムト秒電子ビームを用いた。ビームの進行方向に対して前方に放射される場合 ($\theta = 40^\circ$) のインターフェログラムは、後方に放射される場合 ($\theta = 70^\circ$) に比べて鋭く変化している様子を考慮すると、前方に放射される場合の方が高周波の成分の割合が大きいと予想される。図6(b)に、 θ が変

化した場合の、高速フーリエ変換により得られる周波数スペクトルを示す。理論的な周波数(\times) [4,5]と一致する成分が観測された。放射角 $\theta:40^\circ$ の時、0.7 THzに1次の成分を観測した[5]。

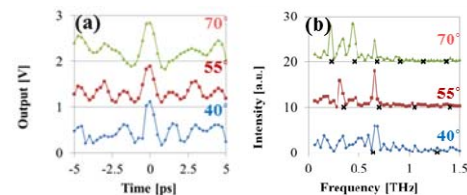


図1. SPRの放射角が変化した場合の(a)インターフェログラムと(b)周波数スペクトル

フェムト秒電子ビームを用いて、スミス・パーセル放射 (SPR) により多モードテラヘルツ波を発生し、マイケルソン干渉計による分光を行った。放射角:40°の時、0.7 THzに1次の成分を観測した。今後、メタ(メタマテリアル)表面等を用いた高効率テラヘルツ放射の研究展開等を行う。

本研究は、科研費(25870404、26249146)、産業技術総合研究所 受託研究により支援を受けました。

Reference

- 1) J. Yang et al., Nucl. Instrum. Meth. A 637, S24 (2011).
- 2) T. Kondoh et al., Radiat. Phys. Chem. 84, 30 (2013).
- 3) T. Takahashi et al., Phys. Rev. E 50, 4041 (1994).
- 4) S. J. Smith and E. M. Purcell, Phys. Rev., 92, 1069 (1953).
- 5) K. Kan et al., Electron. Comm. Jpn. 99, 22 (2016).
- 6) K. Kan et al., Appl. Phys. Lett. 102, 221118 (2013).

* K. Kan, 06-6879-4285, koichi81@sanken.osaka-u.ac.jp; **Y. Yoshida, 06-6879-4284, yoshida@sanken.osaka-u.ac.jp

水溶液の放射線誘起スーパー反応研究

産研量子ビーム物質科学研究分野

室屋裕佐^{*}、古澤孝弘、小林一雄、山本洋揮、吉田哲郎、金森航

Study on radiation-induced chemical reactions in aqueous solutions

Dept. of Beam Materials Science, The Institute of Scientific and Industrial Research, Osaka University

Yusa Muroya, Takahiro Kozawa, Kazuo Kobayashi, Hiroki Yamamoto, Tetsuro Yoshida, Wataru Kanamori

In order to study radiation chemistry at high temperature / high pressure condition (HTHP), a flow-type HTHP system was newly manufactured and installed in pulse radiolysis at L-band linac. By using the system, ns pulse radiolysis of pure water and cystamine containing aqueous solution were performed at elevated temperatures.

軽水炉において冷却水の放射線分解生成物 (H_2O_2 や O_2 等)は腐食電位を変化させ、応力腐食割れに関わる。炉内は高放射線環境下であり直接的な内部環境の把握は難しいため、素過程の理解と整理が重要である。高温下の反応は迅速であり、素過程解明には時間分解能をもった測定が有効である。一方で、実際のプラント内の放射線場はパルス的ではなく定常的であり、パルスラジオリシスのみならずγラジオリシスのアプローチも重要である。今年度、Lバンドライナックおよびコバルト棟で両手法の実験に適用可能な高温高圧システムの製作と導入を行った(図1)。照射容器には耐腐食性の高い Hastelloy を用い、中心部に $\Phi 6 \text{ mm} \times 15 \text{ mm}$ の照射試料部を設けた。ビームは2mm厚の壁を通して照射試料に入射し、分析光はこれと垂直方向にサファイア窓を通して試料を透過する。照射試料はHPLCポンプからワンズルーでフローする。温度および圧力は500 °C、40 MPaまで使用可能である。

製作した高温高圧システムをLバンドライナックのナノ秒パルスラジオリシスに組み込み、予備実験を行った。純水 (Ar脱気) を用いて室温~250 °C (圧力は25 MPa) における過渡吸収測定を行った。可視~近赤外にわたり水和電子のスペクトルを良好に取得できた(図2)。250 °Cにおいて、ビーム電荷量(線量)を変化させた時の水和電子の

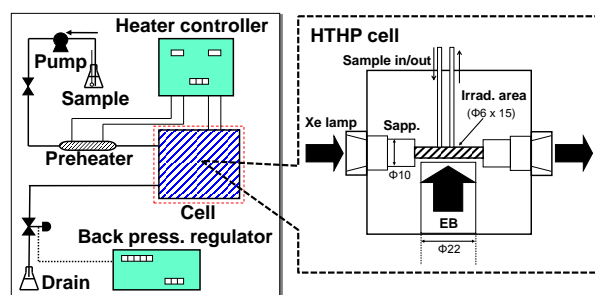


Fig. 1. Flow-type HTHP system for pulse radiolysis and gamma radiolysis experiment.

時間プロファイルを図3に示す。照射直後のシグナルは線量に比例して増大するが、100 ns以降の減衰はほぼ同じとなり、二次反応に典型的な時間挙動を示した。(1) $e_{aq}^- + \text{OH} \rightarrow \text{OH}^-$ 、(2) $e_{aq}^- + \text{H}_3\text{O}^+ \rightarrow \text{H} + \text{H}_2\text{O}$ 、(3) $e_{aq}^- + e_{aq}^- + 2\text{H}_2\text{O} \rightarrow \text{H}_2 + 2\text{OH}^-$ といった反応が重畳している。反応(3)は水素発生に関わる反応であるが、高温下の反応速度定数は150

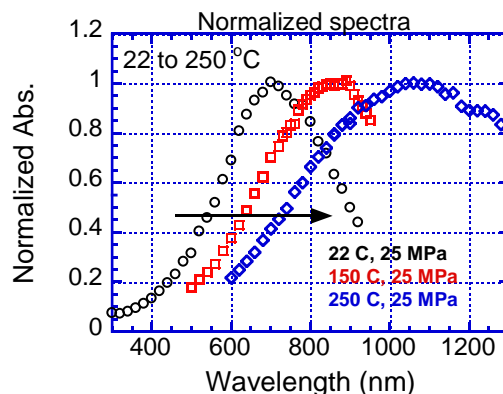


Fig. 2. Optical spectra of e_{aq}^- at elevated temperatures (22 to 250 °C, 25 MPa).

^{*} Y. Muroya, 06-6879-8502, muroya@sanken.osaka-u.ac.jp

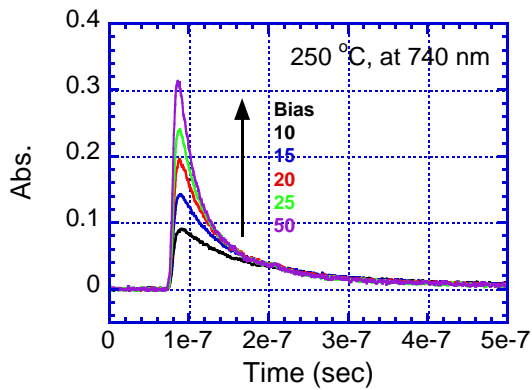


Fig. 3. Dose dependent time behaviors of e_{aq}^- at 250 °C, 25 MPa (probed at 740 nm).

°C以上で急減することが報告されている[1]。しかしその反応速度定数を用いたスパー反応計算（モンテカルロ計算）では、高温下の水素G値（プライマリG値）を再現できない[2]。近年、二電子反応の新たなパスも提案されている[3]。本研究で得られた時間挙動の線量率依存性を基に、スパー拡散・均一反応計算と合わせて高温下の二電子反応のメカニズムを明らかにしていく予定である。

次にシスタミン(RSSR)水溶液の高温パルスラジオリシスを行った（10 mM、Ar脱気）。シスタミンは電子捕捉剤であり、生成物が強い光吸収を持つため、電子の間接プローブに有用である。電子捕捉剤にはこれまでメチルビオローゲン(MV)や4,4'-ビピリジル(BPY)を用いてきたが、照射による蓄積（MV：パルスを多数照射できない）や水への溶解度が低い（BPY：<10 mM）といった問題があり、ピコ秒以下の高速過程のプローブとして必ずしも万能ではない。シスタミンの溶解度は高く(>1 M)、高い捕捉能を達成できることから、物理化学過程の電子プローブ剤として有望である。22~200 °Cにおける吸収スペクトルを図4に示す。吸収ピーク（ca.420 nm）は温度に依存しないが、バンド幅が高温で増加した。スペクトル形状は、別途ピコ秒パルスラジオリシスで測定したものとほぼ同じであることから、一段階の反応（ $e_{aq}^- + \text{RSSR} \rightarrow \text{RSSR}^-$ ）で生成するアニオンラジカルに帰属される。半値幅は0.985 eV（22 °C）→ 1.22 eV（200 °C）に増加し、モル吸光係数は9400 $\text{M}^{-1}\text{cm}^{-1}$

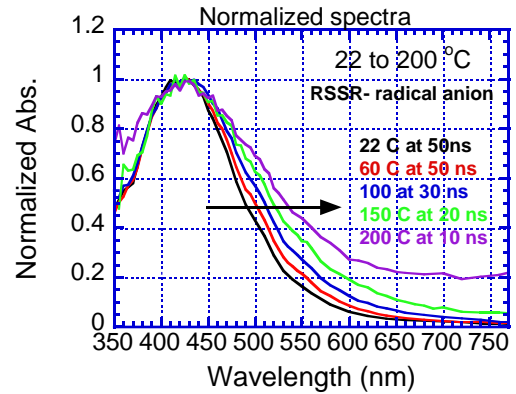


Fig. 4. Optical spectra of RSSR^- at elevated temperatures (22 to 200 °C, 25 MPa).

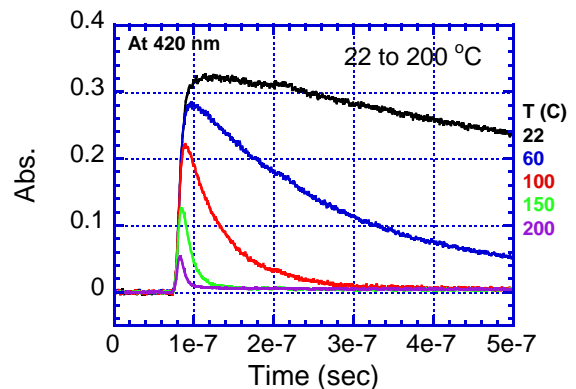


Fig. 5. Temperature dependent time behaviors of RSSR^- at elevated temperatures (22 to 200 °C, 25 MPa) probed at 420 nm.

(22 °C) → 7590 $\text{M}^{-1}\text{cm}^{-1}$ (200 °C)と見積もられた。ラジカルアニオンの寿命は、室温ではマイクロ秒程度と長いですが、高温ほど短くなった（図5）。減衰は擬一次的であることから、ダイマー形成に至っていると考えられる（ $\text{RSSR}^- + \text{RSSR}^- \rightarrow (\text{RSSR}^-)_2$ ）。ラジカルは高温で短寿命化するが、ピコ秒領域で見るとほとんど減衰していないことから、高温ピコ秒パルスラジオリシスで用いる電子捕捉剤として最適であると言える。高濃度下ではピコ秒以下の捕捉時間が達成可能であり、溶媒和電子のみならずその先駆体も捕捉することから、高温下の物理化学過程の解明に活用できると期待される。

Reference

- 1) A. J. Elliot, D. M. Bartels et al, *Report AECL report*, 153-127160-450-001 (2009).
- 2) S. Sanguanmith, Y. Muroya, J.-P. Jay-Gerin et al, *Chem. Phys. Lett.*, **508**, 224 (2011).
- 3) D. Swiatla-Wojcik, *Chem. Phys. Lett.*, **641** (2015) 51.

電子・光二段階励起フェムト秒パルスラジオリシス

産研極限ナノファブリケーション研究分野

神戸正雄*、近藤孝文、西井聡志、菅 晃一、楊 金峰、田川精一、吉田陽一

Development of UV femtosecond pulse radiolysis and observation of alkyl radical in dodecane

Dept. of Advanced Nanofabrication

Masao Gohdo*, Takafumi Kondoh, Satoshi Nishii,

Koichi Kan, Jinfeng Yang, Seiichi Tagawa, Yoichi Yoshida

The new measurement technique, electron-light double excitation pulse radiolysis or pulse-pump-probe method of fs-pulse radiolysis was developed and demonstrated. This measurement technique enables to understand the primary process of ionizing radiation induced reactions, reactivity and reaction pathway from the excited state of neutral, anion or cation radicals, and higher excited states. Using 800 nm laser light pulse from Ti:Sapphire fs laser for both of the pump and probe light, the pulse-pump-probe fs radiolysis measurement were demonstrated on n-dodecane.

フェムト秒パルスラジオリシスは、放射線化学反応、特にフェムト秒～ピコ秒領域の反応を解析する有用な手段である。我々はこれまで、Sバンド光陰極RF電子銃ライナックとフェムト秒レーザーを用いてフェムト秒パルスラジオリシスの高時間分解能化、高度化を行ってきた。本年度は、ライナック移設後の試験を終え、フェムト秒パルスラジオリシスシステムの再稼働と、電子線照射後に生じた過渡種をレーザー光パルスで再励起して行く、電子・光二段階励起フェムト秒パ

ルスラジオリシスを開発したので報告する。

フェムト秒パルスラジオリシスでは、電子線照射の前後にレーザー光を適宜遅延して入射する、ストロボスコーピック法(または、パルス-プローブ法)により、過渡吸収を測定する。このシステムに、電子線照射後の特定の時間に、通常は電子線照射で生じた過渡種を励起する励起光パルスを入射することで、電子・光二段階励起フェムト秒パルスラジオリシス(または、パルス-ポンプ-プローブ法)が実現する。この測定手法は、過渡種の励起状態からの反応や、過渡種の生成

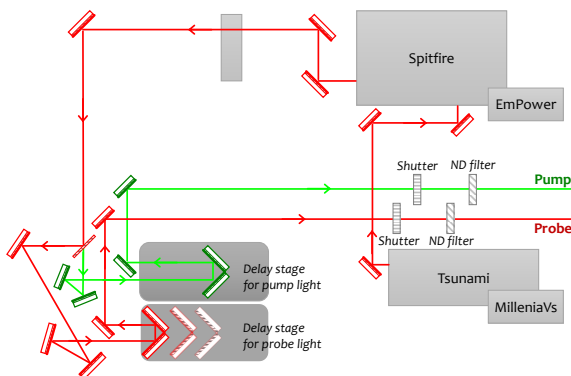


Fig. 1 Femtosecond laser system with delay lines for pump and probe light

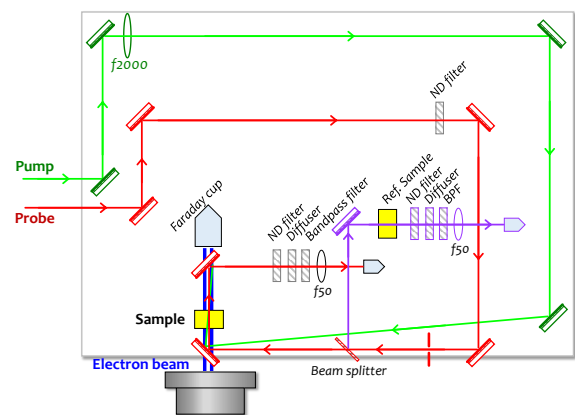


Fig. 2 Optics for pulse-pump-probe experiment

* M. Gohdo, 06-6879-4285, mgohdo@sanken.osaka-u.ac.jp

過程の解明に有用な情報を与える。本年度は、励起光、検出光ともに 800 nm を用いた。図 1 のように、チタンサファイアレーザー光の基本波を再生増幅器で増幅した後、25:75 のビームスプリッターでレーザー光を 2 分岐し、それぞれ独立に操作可能な遅延ステージを介した後、反射型 ND フィルターで適宜光量調節を行いビームポートへと導いた。尚、ポンプには光量の多い分岐光を用いた。ビームポート周りの光学系を図 2 に示す。励起光は、光密度を上げるため、レンズを用いて集光し、検出光、電子ビームと同軸としてサンプルに入射した。ただし、励起光の焦点はサンプルより十分奥となるよう調整した。これは、フェムト秒レーザー光によるアブレーションや、多光子吸収を防ぐためである。

図 3 は、電子・光二段階励起フェムト秒パルスラジオリシスの測定例である。サンプルは脱酸素した n-ドデカンである。前述のとおり、検出光、励起光ともに 800 nm で、この波長ではドデカンから生じたカチオンラジカルによる過渡吸収が観測できる。ドデカンは、筆者らの研究により、放射線分解過程が解明されつつあり、分解がラジカルカチオンの励起状態から起こると考察している。図 3 のとおり、アルキルラジカルカチオンは励起によりブリーチし、励起前まではブリーチが回復しなかった。詳細は別稿とするが、励起光タイミングを変えることで、ブリーチのタイミングが制御

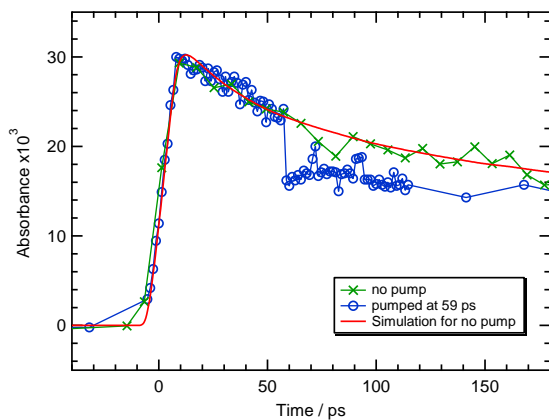


Fig. 3 Time profiles of “pulse-pump-probe” experiment and “pulse-probe” experiment monitored at 800 nm with/without 800 nm pump light.

でき、また、図 4 のとおりブリーチ量は励起光強度に比例した。従って、励起による多光子吸収は本測定で用いた励起光強度の範囲で起こっていない。

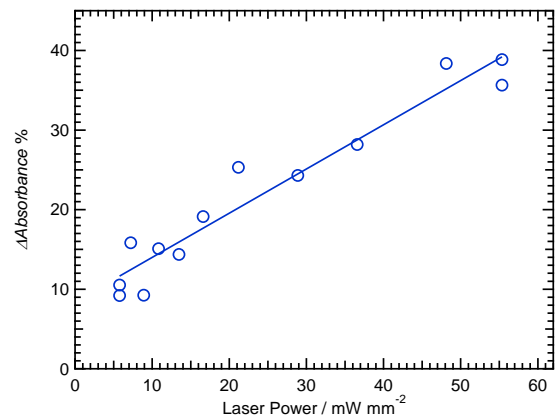


Fig. 4. Laser power dependence on the amount of the breach of the transient absorption. $\Delta\text{Absorbance} = (\text{Absorbance with pump}) / (\text{Absorbance without pump})$. $\Delta\text{Absorbance}$ was calculated at just after the pump light irradiation.

放射線化学において、重要な反応であるジェミニートイオン再結合反応は、時に高励起状態 ($S_n, n \geq 2$) を生成物として与えると言われているが、この高励起状態の反応性や寿命はそれほど多くが解明されているわけではない。また、反応中間体の収率について、カチオンラジカルやアニオンラジカルの励起状態の関与を考慮する必要がある反応系が確かに存在し、これらのイオンラジカルの寄与を実験的に確かめる手段がなかった。今回開発した電子・光二段階励起フェムト秒パルスラジオリシスを利用により、これらの課題の解明が期待できる。

フェムト秒時間分解電子顕微鏡の開発

産研極限ナノファブリケーション研究分野^a

楊 金峰*、菅 晃一、近藤孝文、神戸正雄、吉田陽一

Development of femtosecond time-resolved electron microscopy

Dept. of Advanced Nanofabrication,

Jinfeng Yang^{*}, Koichi Kan, Takafumi Kondoh, Masao Gohdo, Yoichi Yoshida

Since 2012, the first prototype of radio-frequency (RF) gun based relativistic-energy ultrafast electron microscopy (UEM) has been developed in Research Laboratory for Quantum Beam Science at ISIR. In 2015, we succeeded to observe excellent-quality electron diffraction patterns from single-crystal gold sample. The single-shot diffraction measurement is also available in the observations. In transmission electron microscopy (TEM) demonstrations, we succeeded to observe a relativistic-energy TEM imaging from polystyrene micro-particles with diameter of 1 μm was observed under the magnification of 3,400. The single-shot TEM imaging measurement was succeeded under the magnification of 1,000.

はじめに

時間的に100フェムト秒、空間的にサブナノメートルの分解能を有する高速測定は、世界中の物質構造科学研究者が待望してやまない「夢」である。我々は、世界に先駆けてレーザーフォトカソード高周波 (RF) 電子銃を用いた相対論的エネルギーの時間分解電子顕微鏡の開発を目指した。図1に、2012年10月に完成した時間分解能電子顕微鏡実証機の写真を示す[1]。2014年に実験室の移設に伴い、電子ビーム大強度化と低エミッタンス化を行った。2015年には相対論的フェムト秒電子線パルスが発生し、電子回折や電子顕微鏡の原理実証を行った。以下に、実証機における実証実験および、相対論的フェムト秒電子線パルスを用いた電子回折と電子顕微鏡の測定結果について報告する。

相対論的フェムト秒電子線パルスを用いた電子顕微鏡装置

電子顕微鏡の空間分解能をサブナノメートルに向上させるには、極低エミッタンスの電子ビームが必要不可欠である。本装置は、フェムト秒電

子線パルスが発生するフォトカソード RF 電子銃、コンデンサレンズ、コンデンサ絞り、対物レンズ、中間レンズと投影レンズから構成される。

本 RF 電子銃では、RF 電場の非線形効果によるビームの空間広がりやエネルギー幅の増大を極限まで低減するために、最も対称性が良い丸型加速空洞を採用した。フォトカソード材料として、電気的と熱的伝導性能が良く、寿命が長い無酸素銅を使用した。無酸素銅を選定したもう一つ理由は、速い時間応答性であり、フェムト秒電子線パルスの発生に適している。カソードの光源として、フェムト秒 Ti:Sapphire レーザーの 3 倍波 UV 光 (266nm、パルス幅 90fs) を用いた。実験では、パルスエネルギーが 10 μJ 以上の UV 光を無酸素銅カソードに照射すれば、パルス当たりの電子数が 10⁷ 個のビームが発生可能である。

電子の入射および制御系には、1 台コンデンサレンズ (CL) とコンデンサ絞りをを用いて行われた。結像部には、対物レンズ、中間レンズと投影レンズの 3 つの強磁場レンズを用いた。球面収差、色収差と非点収差を最小化するために、磁極やヨークの形状を最適化しており、電子レンズ系として

^{*} J. Yang, 06-6879-4285, yang@sanken.osaka-u.ac.jp

十分な特性が実現されている。対物レンズでは、上極と下極に非対称の構造を採用し、最大起磁力が 35kAT である。

電子回折図形と電子顕微鏡像の検出には、我々が MeV 電子回折測定⁷⁾に成功したパルスあたり少数の電子数でも測定可能な T1 をドーピングした CsI の柱状結晶化素子と浜松フォトニクス社製の Fiber Optic Plate を採用した。素子から発生した光は、厚さが 5 μm のポリマー上でアルミニウム蒸着した 45 度の反射ミラーにより伝搬され、最後に浜松フォトニクス社製の EMCCD カメラを用いて測定される。

測定結果と考察

図 2 に、パルスあたり 1.6 pC の電子線パルスを用いた厚さ 10 nm 金単結晶薄膜のシングルパルスと 100 パルス積算で観測した透過電子顕微鏡像(明視野像)を示す。この時、電子ビームのエネルギーは 3.1MeV であり、直径 0.5mm のコンデンサ絞りを使用し、コリメート後の電子ビームのエミッタンスは 0.14mm-mrad であった。図に示すように、RF 電子銃からの暗電流の影響が殆どなく、金単結晶薄膜では 100 パルス積算でコントラストが十分高い電子顕微鏡像が得られていることと、シングルショットの電子顕微鏡像測定に成功したことが大きな成果である。これは、十分高品質の電子ビームが発生でき、電子レンズ系を含めた測定装置全体として優れた性能を有する証拠である。また、シングルショットで測定可能となったことは、今まで観測不可能であった不可逆過程に対する超高速構造変化ダイナミクスの研究を可能にするという極めて大きな意義がある。

結論

以上、フォトカソード RF 電子銃を駆使した高品質フェムト秒電子線パルスを発生し、これを用いた超高速電子顕微鏡の原理実験を行い、シングルショットの電子顕微鏡像測定までに成功した。勿論、像の明るさに関して不十分点があるが、今後、電子ビームの輝度が高めれば、この RF 電子銃を用いた超高压電子顕微鏡が実現可能であろうと考えている。



Fig. 1: The prototype of RF gun based relativistic-energy electron microscopy which was constructed at Osaka University in 2012 and improved in 2014.

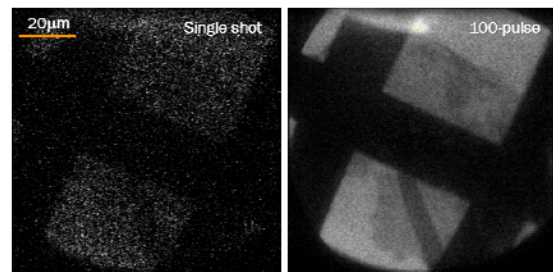


Fig. 2: Relativistic-energy electron microscopy imaging observed from a single-crystal gold film with (left) single-pulse and (right) 100-pulse averaging measurements.

謝辞

本研究は、科研費22246127, 26246026により助成されました。

Reference

- 1) J. Yang, *Microscopy*, 60, No. 3, 157-159 (2015).
- 2) J. Yang, Y. Yoshida, H. Shidata, *Electronics and Communication in Jpn*, 98, No. 11, 50-57(2015).

相対論的フェムト秒電子線パルスを用いた超高速電子線回折装置

産研極限ナノファブリケーション研究分野^a

楊 金峰*、菅 晃一、近藤孝文、神戸正雄、吉田陽一

Ultrafast electron diffraction using relativistic-energy femtosecond electron pulses

Dept. of Advanced Nanofabrication,

Jinfeng Yang^{*}, Koichi Kan, Takafumi Kondoh, Masao Gohdo, Yoichi Yoshida

A radio-frequency (RF) gun based relativistic-energy ultrafast electron diffraction (UED) has been successfully developed in Research Laboratory for Quantum Beam Science at ISIR. We succeeded to observe excellent-quality MeV electron diffraction patterns from single-crystal Mica ($K(Fe,Mg)_3(AlSi_3O_{10})(OH,F)_2$) sample using a 3.1-MeV electron beam with the pulse length of 100 fs. The single-shot diffraction measurement is also available in the observations. In the next step, we will propose the UED study of primary processes and ultrafast reactions in radiation chemistry, i.e. direct visualization of kinetics and reactions of structural molecules produced in short-lived, excited electronic states.

はじめに

物質構造の超高速現象を解明するためには、物理・化学的な素過程を支配する格子系や分子系の運動の観察が不可欠である。そのために、原子の位置をその振動と同じ程度の時間分解能、 ~ 100 fsで捉えることのできる測定技術が要求されている。そこで、我々は、相対論的エネルギーのフェムト秒電子線パルスを用いた超高速電子線回折装置と測定技術の開発を進めてきた。本研究に相対論的エネルギー電子線を用いる最大のメリットは、パルス幅が100fs、パルス当たりの電子数が 10^7 個 (1pC) の短パルスかつ大強度の電子ビームが実現可能である。これにより、シングルショットの電子線回折測定が可能となり、今まで測定困難である不可逆な構造相転移現象や反応過程の観測が実現できる。

我々の相対論的エネルギー電子線パルスを用いた超高速電子線回折装置開発が2007年からスタートした。世界の先行研究に比べて数年遅れのスタートであったが、100fsの時間分解能とシングルショットの測定を実現し、装置としては世界最高性能を達した。2014年から、KEKの協力を得

て、1kHzの常伝導RF電子銃の設計・製作、更なる低エミッタンス電子ビームの発生を目指した透過型カソードの開発をスタートし、2台目の相対論的エネルギー電子線パルスを用いた超高速電子線回折装置を2015年に製作した。以下に、この新しい超高速電子線回折装置を紹介する。初代の装置については、文献1~3に参考していただきたい。

相対論的フェムト秒電子線パルスを用いた電子顕微鏡装置

図1に、新たな相対論的エネルギー電子線パルスを用いた超高速電子線回折装置を示す。本装置は、新型フォトカソードRF電子銃、電子ビーム入射光学系、サンプルホルダー、電子線回折測定システムから構成された。新型RF電子銃では、ハーフセルとフルセル間のirisの半径を大きくし、irisの厚さを薄くして、加速空洞の π モードと0モードの共振周波数の差を従来のRFガンダの3.5MHzから15.2MHzまで広げた。irisの形状は楕円形状を変更し、RF加速位相によるエミッタンスの変化が少なくなり、iris近傍における

* J. Yang, 06-6879-4285, yang@sanken.osaka-u.ac.jp

電磁場の非線形成分を減らした。また、従来の RF 電子銃に比べて、iris の表面電界を 13% に低減することに成功し、冷却システムの増強と冷却機構の改良を行い、将来的に 1kHz の高繰り返し運転 (3MW, 1 μ s, 1kHz) を目指す。RF 電子銃から発生した電子ビームは、RF 電子銃の直後に取付けられたソレノイド磁石を用いて平行化し、コンデンサーレンズを通して試料に輸送される。コンデンサーレンズの前に直径 0.5mm の絞りを取り付け、ビームコリメーションを行った。電子線回折の測定には、我々が初代の装置に開発成功したパルスあたり少数の電子数でも測定可能な T1 をドープした CsI の柱状結晶化素子と浜松フォトニクス社製の Fiber Optic Plate を採用した。

測定結果と考察

図 1 の右下に、0.1pC の MeV 電子ビームを用いた絶縁体 Mica 単結晶のシングルパルス、10 パルス、100 パルスの測定結果を示す。シングルショットの条件でも非常に明確な回折パターンが測定でき、100 パルスの測定では明瞭な電子回折像が得られることがわかる。この回折パターンの明瞭さは、RF 電子銃から発生した電子ビームの性能、電子レンズを含めた測定装置の性能によって決まる。明瞭な電子回折像が得られていることは、極めて高品質の電子ビームが発生でき、装置全体として優れた性能を有する証拠である。

また、シングルショットで測定可能となったことは、今まで観測不可能であった不可逆過程に対する超高速の結晶構造変化ダイナミクスの研究を可能にするという極めて大きな意義がある。

結論

結論として、我々がフォトカソード RF 電子銃を用いて低エミッタンス・フェムト秒電子線パルスを発生し、フェムト秒超高速電子線回折装置の開発と測定に成功した。世界の先行研究より数年遅れのスタートであったが、装置としての時間分解能や、回折パターンの明瞭さ (空間分解能)、シングルショットの測定等について、世界最高性能を達した。

謝辞

本研究は、科研費22246127, 26246026により助成されました。

Reference

- 1) N. Naruse, et al., J. Particle Accelerator Society of Japan, 7, 261-270 (2011).
- 2) Y. Murooka, et al., Appl. Phys. Lett. 98, 251903 (2011).
- 3) Y. Giret, et al., Appl. Phys. Lett., 103, 253107 (2013); Phys. Rev. B, 88, 184101 (2013).

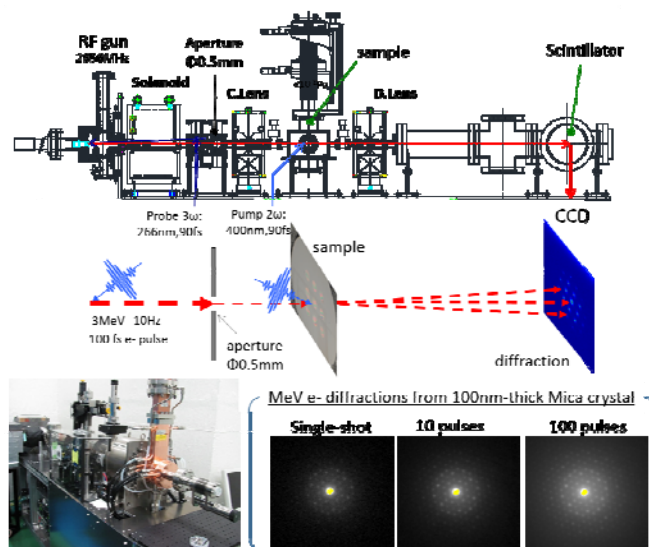


図 1: RF 電子銃を用いた超高速電子線回折装置と測定した絶縁体 Mica 単結晶の電子回折図形

シクロピレニレンのラジカルイオンの電子状態の検討

産研励起分子化学研究分野^a、産研量子ビーム科学研究施設^b、京大化研^c

藤塚 守^a、藤乗幸子^b、岩本貴寛^c、茅原栄一^c、山子 茂^c、真嶋哲朗^a

Radical Ions of Cyclopyrenylene: Comparison of Spectral Properties with Cycloparaphenylene

Dept. of Molecular Excitation Chemistry^a, Research Laboratory for Quantum Beam Science^b,
Institute for Chemical Research, Kyoto University^c

Mamoru Fujitsuka^a, Sachiko Tojo^b, Takahiro Iwamoto^c, Eiichi Kayahara^c, Shigeru Yamago^c, Tetsuro Majima^a

Hoop-shaped π -conjugated molecules have attracted much attention. In this study, the radical ions of [4]cyclo-2,7-pyrenylene ([4]CPY), a cyclic tetramer of pyrene, and [4]cyclo-4,5,9,10-tetrahydro-2,7-pyrenylene ([4]CHPY) were investigated using radiation chemical methods, namely, γ -ray radiolysis and pulse radiolysis. The absorption spectra of the radical ions of [4]CPY and [4]CHPY showed clear peaks in the near-IR and UV-visible regions similar to those of [8]cycloparaphenylene ([8]CPP). Theoretical calculations using time-dependent density functional theory provided reasonable assignments of the observed absorption bands. It was indicated that the C4-C5 and C9-C10 ethylene bonds of [4]CHPY do not contribute to the electronic transitions, resulting in absorption spectra similar to those of [8]CPP. On the other hand, it was confirmed that the allowed electronic transitions of the radical ions of [4]CPY are different from those of the radical ions of [4]CHPY and [8]CPP.

環状 π -共役オリゴマーであるcycloparaphenylene ([*n*]CPP, Fig. 1a)は高度にひずんだ構造に由来する興味深い種々の物性を示すことから広く関心を集めている。^{1,2} 近年、pyreneを構成単位とした環状 π -共役オリゴマーである[4]cyclo-2,7-pyrenylene ([4]CPY, Fig. 1b) および [4]cyclo-4,5,9,10-tetrahydro-2,7-

pyrenylene ([4]CHPY, Fig. 1c)の合成が報告された。[4]CPYは[8]CPPと同等の径を有し、ともに(8,8)arm-chair型carbon nanotubeの一部とみなせることから(Fig. 1d)、電導材料ならびに超分子への展開が期待される。これらの諸物性の解明にはラジカルイオン種の電子状態に関する知見が重要である。すでにわれわれは、[*n*]CPPラジカルイオン種のスペクトルならびに電子状態を報告した。² これに関連して、[4]CPYと[4]CHPYの放射線化学反応によるラジカルイオンについて検討し、新たな知見を得たので報告する。³

Fig. 2a, cに γ -線照射により得られたBuCl低温マトリックス中の[4]CPYと[8]CPPラジカルカチオン([4]CPY^{•+}と[8]CPP^{•+})の吸収スペクトルを示す。[4]CHPYはBuCl低温マトリックスへの溶解性が不十分なためそのラジカルカチオン([4]CHPY^{•+})の吸収は観測されなかった。一方、DCE中の[4]CPYと[4]CHPYのパルスラジオリシスにおいて、それらのラジカルカチオン([4]CPY^{•+}と[4]CHPY^{•+})の過渡吸収スペクトルを観測した(Fig. 2a, b)。いずれの場合も近赤外領域(1600-1900 nm)ならびに可視域(400-460

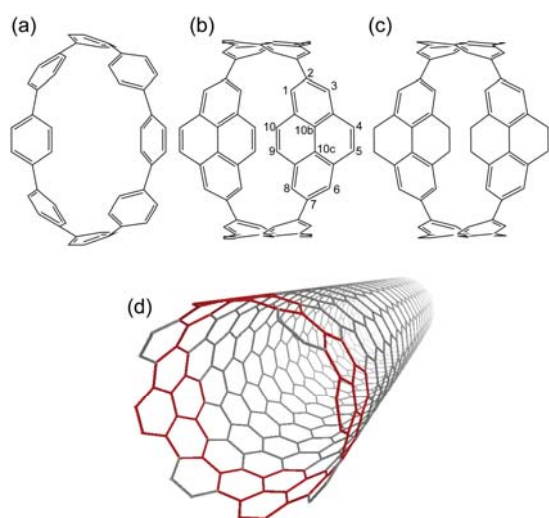


Fig. 1. Molecular structures of (a) [8]CPP, (b) [4]CPY, (c) [4]CHPY, and (d) (8,8) arm-chair carbon nanotube. In (d) the [4]CPY unit is indicated by red.

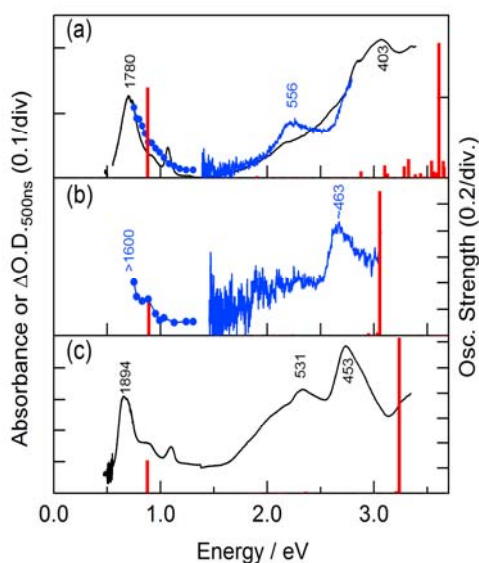


Fig. 2. Absorption spectra of the radical cations of (a) [4]CPY, (b) [4]CHPY, and (c) [8]CPP. Spectra obtained by γ -ray irradiation are indicated by black, while transient absorption spectra during pulse radiolysis are indicated by blue. Numbers near absorption peaks indicate peak positions in nm unit. Bars indicate oscillator strengths of radical cations by TDDFT.

nm)に明瞭な吸収帯を示すことが確認された。

同様に[4]CPYと[4]CHPYのMTHF低温マトリックスの γ 線照射、およびDMF溶液のパルスラジオリシスによる過渡吸収測定により [4]CPY $^{\bullet+}$ と[4]CHPY $^{\bullet+}$ の吸収スペクトルを観測し、これらを[8]CPP $^{\bullet+}$ と比較した。いずれのラジカルアニオンにおいても近赤外領域と可視域の吸収帯が確認された。

ラジカルイオン種の吸収帯の帰属を目的とし、(U)B3LYP/6-31G(d)レベルのTDDFT計算を行ったところ、[4]CHPY $^{\bullet+}$ の近赤外領域の吸収は縮退したHOMO-1およびHOMO-2からHOMOへの遷移であり、可視域の吸収はHOMO-1およびHOMO-2からLUMOへの遷移とHOMOから縮退したLUMO+1とLUMO+2への遷移であることが確認され、これらの吸収は本質的に[8]CPP $^{\bullet+}$ の吸収と同一であり、C4-C5およびC9-C10 ethylene bondが電子遷移には寄与しないことが確認された。[4]CHPYと[8]CPPの電子遷移の一致はラジカルアニオンでも確認された。

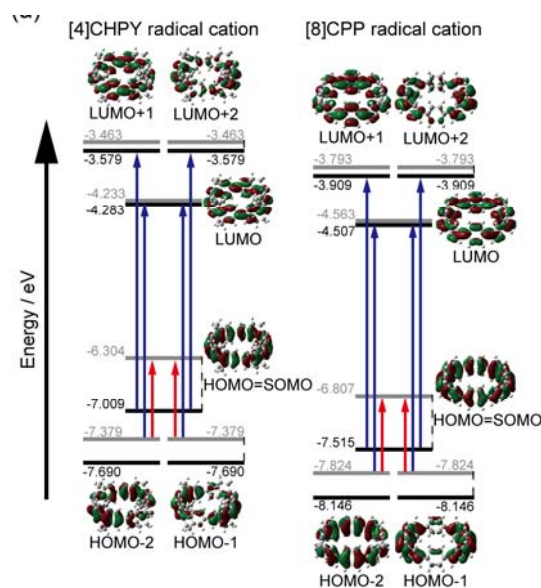


Fig. 3. Energy levels and MO patterns of radical cation of [4]CHPY and [8]CPP calculated at UB3LYP/6-31G(d) level assuming C_2 and D_{4d} symmetries, respectively. Numbers indicate energy levels in eV unit. MO levels for α and β electrons are indicated by black and gray, respectively. Main transitions, which provide the near-IR and UV bands are indicated by red and blue arrows, respectively.

一方、[4]CPY $^{\bullet+}$ の近赤外領域の吸収は縮退したHOMO-5とHOMO-6からHOMOへの遷移であり、 D_1 ではなく D_4 状態生成に対応することが確認された。一方、可視域の吸収はHOMO-4からLUMO+2とLUMO+3への遷移であることが確認された。以上のように遷移に寄与するMOは異なるものの、これらのMOパターンは[8]CPPのものと同様であることが確認された。同様にラジカルアニオンにおいても、パターンが類似したMO間の遷移が近赤外ならびに可視域の吸収帯に寄与していることが確認された。

Reference

- 1) M. Fujitsuka, D. W. Cho, T. Iwamoto, S. Yamago, T. Majima: *Phys. Chem. Chem. Phys.* **14** (2012) 14585.
- 2) M. Fujitsuka, S. Tojo, T. Iwamoto, E. Kayahara, S. Yamago, T. Majima: *J. Phys. Chem. Lett.* **5** (2014) 2302.
- 3) M. Fujitsuka, S. Tojo, T. Iwamoto, E. Kayahara, S. Yamago, T. Majima: *J. Phys. Chem. A.* **119** (2015) 4136.

先端マイクロ波分光による有機エレクトロニクス材料の基礎物性研究

工学研究科・応用化学専攻

熊野正孝、大賀光、佐伯昭紀*

Fundamental Property of Organic Electronic Materials Studied by Advanced Microwave Spectroscopy

Department of Applied Chemistry, Graduate School of Engineering

Masataka Kumano, Hikaru Oga, Akinori Saeki*

The intriguing photoactive features of organic-inorganic hybrid perovskites have enabled the preparation of a new class of highly efficient solar cells. However, the fundamental properties, upon which the performance of these devices is based, are currently under-explored, making their elucidation a vital issue. Herein, we have investigated the local mobility, recombination, and energetic landscape of charge carriers in a prototype $\text{CH}_3\text{NH}_3\text{PbI}_3$ perovskite (PVK) using a time-resolved microwave conductivity (TRMC) technique. Modulating the microwave frequency from 9 GHz toward 23 GHz allowed us to determine the intrinsic mobilities of each PVK sample ($60\text{--}75\text{ cm}^2\text{V}^{-1}\text{s}^{-1}$), which were mostly independent of the mesoporous scaffold. Our study provides a basis for understanding perovskite solar cell operation, while highlighting the importance of the mesoporous layer and the perovskite fabrication process.

次世代再生可能エネルギーの一翼を担うべく、柔軟性・軽量性・製造コストに優れた有機太陽電池の実用化を目指した研究が世界各国で行われている。2012年に酸化チタン・有機無機ペロブスカイト膜・ホール輸送薄膜から成るハイブリッド型太陽電池が登場し(図1)、2015年には最高変換効率は20%まで上昇した。この太陽電池は色素増感太陽電池の優れた光電変換能を有しながら有機薄膜太陽電池のように全固体型であり、色素増感太陽電池の時にボトルネックであった開放電圧のロスが非常に小さい特徴を持つ。しかし、有機無機ハイブリッド・ペロブスカイトの光電物性は未だ不明な点が多く、高効率化と併せて活発な研究が行われている。

我々は、これまで開発してきた光励起・時間分解マイクロ波伝導度(FP-TRMC)法^[1-3]のさらなる深化に

向け、近年、通常のマイクロ波周波数(9 GHz)に加えて、高周波数(15, 23, 34 GHz)の回路を設計・開発し、GHz周波数変調測定システムを構築した(図2)^[4]。これまでの評価では実部のみに着目して電荷キャリア移動度評価や太陽電池開発に利用してきたが、実虚部から成る複素伝導度を上述のGHz周波数変調法と組み合わせることで、電荷キャリアのトラップ密度と深さに関する情報が得る手法を確立した。

それぞれの周波数で微小周波数変調(例えば±60 kHz)し、空洞共振器のQ値の変化と周波数シフトを分離することで、光過渡伝導度の実虚部の分離・評価が可能になる。このFrequency-modulated TRMC(FM-TRMC)を用いて、酸化チタンナノ粒子を評価したところ、他の有機材料と比べて3倍以上大きい伝導度の虚部成分(共振周波数のシフトに相当)が観測さ

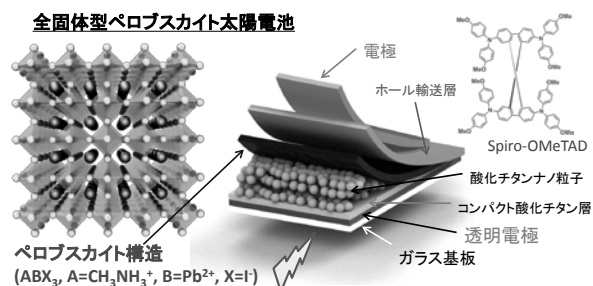


図1. 有機無機ハイブリッド・ペロブスカイト太陽電池

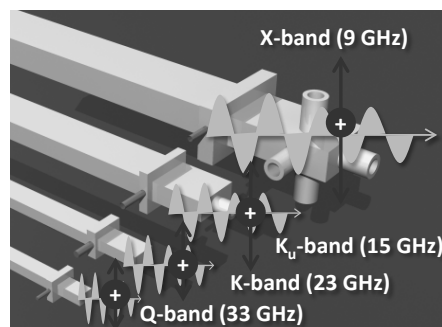


図2. GHz周波数変調マイクロ波法(FM-TRMC)

* A. Saeki, 06-6879-4587, saeki@chem.eng.osaka-u.ac.jp

れ、しかも時間とともに虚部成分が減少するプロファイルが得られた。独自に構築したDrude-Smith-Zenerモデルを用いて実虚部比の周波数分散を解析したところ、電荷キャリアトラップの深さ(70~110 meV)と密度(全キャリア中98%程度、 10^{18} / cm^3)を得ることに成功した。伝導度のアレニウスプロットの傾きから得られる活性化エネルギーからもほぼ同等のトラップ深さが得られており、周波数・実虚部・時間・温度から多面的に電荷分離・輸送過程メカニズムを調べる手法を確立した。さらに一般的な有機薄膜太陽電池膜(P3HT:PCBM)との比較から、GHz光過渡伝導度の実部と虚部の時間挙動の違いと、浅いトラップの深さ・相対濃度に関連があることを示した。

次にFM-TRMC法を用いて塗布法で作製したペロブスカイトの光電変換過程の詳細を検討した^[5]。ペロブスカイト単膜、ペロブスカイト/メソポーラス酸化チタン(mp-TiO₂)膜、ペロブスカイト/メソポーラスアルミナ(mp-Al₂O₃)膜の9 GHz TRMC信号最大値($\phi\Sigma\mu_{\text{max}}$)のレーザー強度依存性を評価した。mp-TiO₂膜単体では励起密度の上昇に伴い、トラップフィリングに帰属される $\phi\Sigma\mu_{\text{max}}$ の極大が見られるのに対し、ペロブスカイト/mp-TiO₂膜ではそのような挙動は見られない。さらに低励起強度領域での $\phi\Sigma\mu_{\text{max}}$ から、ペロブスカイトはmp-TiO₂の有無にかかわらず20 cm²/Vs程度の高い局所移動度を持つことが明らかとなった。代表的な有機薄膜太陽電池であるP3HT:PCBM(0.22 cm²/Vs)と比べると、100倍程度移動度が高い。また、減衰時間の解析から電荷キャリア再結合定数を評価したところ、Langevinモデルから計算される再結合定数と比べて5桁ほど再結合が抑制されていた。さらに

mp-TiO₂と組み合わせた薄膜では、電子が一旦mp-TiO₂に流れ込んでからペロブスカイトと再結合する過程が含まれるために、再結合速度定数はさらに1桁抑制された。

また、図3に示すように、無機下地膜(TiO₂ or Al₂O₃)とペロブスカイト(PVK)作成方法(1段階法 or 2段階法)によって9 GHzで評価した局所移動度は大きく異なり、原子間力顕微鏡で見られるペロブスカイトの結晶サイズと正の相関が見られた。したがって、結晶が大きくなるほど電気特性が向上し、太陽電池デバイスの性能向上に関係していると示唆される。さらに、デバイス性能はホール輸送層へのホール移動過程も重要であり、その直接評価法としてFP-TRMC法が極めて有効であることを実証した^[6]。

先端マイクロ波分光の進化をめざし、粉末試料中の電荷移動度直接評価および溶液中の高分子の分子内移動度評価を可能にするPulse-radiolysis TRMC(PR-TRMC)の開発を行っている。FP-TRMCでも電子受容体を分散した絶縁性マトリックスを用いたポリマーブレンドを報告しているが^[7]、半導体ポリマーの分子間相互作用を完全に排除することは困難であることが分かったため、PR-TRMCを用いた溶液中の孤立分子評価の実現が望まれる。

Reference

- 1) A. Saeki, M. Tsuji, S. Seki, *Adv. Energy Mater.* **1** (2011) 661.
- 2) A. Saeki, S. Yoshikawa, M. Tsuji, Y. Koizumi, M. Ide, C. Vijayakumar, S. Seki, *J. Am. Chem. Soc.* **134** (2012) 19035.
- 3) Y. Noguchi, A. Saeki, T. Fujiwara, S. Yamanaka, M. Kumano, T. Sakurai, N. Matsuyama, M. Nakano, N. Hirao, Y. Ohishi, S. Seki, *J. Phys. Chem. B* **119** (2015) 7219.
- 4) A. Saeki, Y. Yasutani, H. Oga, S. Seki, *J. Phys. Chem. C* **118** (2014) 22561.
- 5) H. Oga, A. Saeki, Y. Ogomi, S. Hayase, S. Seki, *J. Am. Chem. Soc.* **136** (2014) 13818.
- 6) H. Nishimura, N. Ishida, A. Shimazaki, A. Wakamiya, A. Saeki, L. T. Scott, Y. Murata, *J. Am. Chem. Soc.* **137** (2015) 15656.
- 7) T. Fukumatsu, A. Saeki, S. Seki, *Polym. Chem.* **6** (2015) 5860.

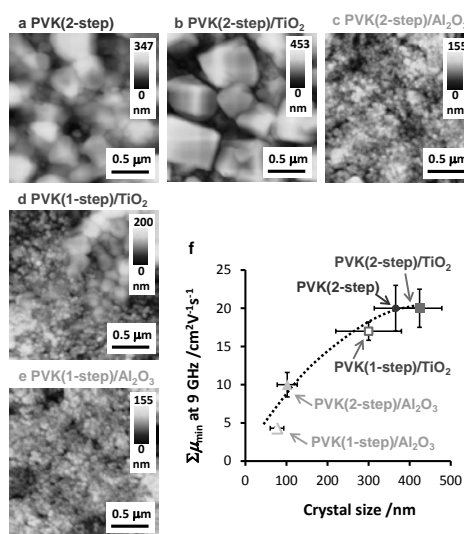


図3. 1 or 2段階法および異なる下地膜上に作製したペロブスカイト材料の9 GHzTRMC局所電荷移動度と結晶サイズの相関。

石英の OSL 特性変化に関する物理的履歴の影響 (II)

大阪大学大学院 理学研究科

長田 章良、山中 千博

The effects of physical weathering on OSL properties in quartz (II)

Department Earth and Space Science, Graduate School of Osaka University

Akira Osada and Chihiro Yamanaka

Optically stimulated luminescence (OSL) using radiation-induced centers in solids has been used for the dating of buried age in the Quaternary period. Quartz is a typical sample for OSL dating and buried time of the sample after zero set of luminescence centers by sunlight is considered the start of clock for dating. However, the properties of OSL is different in each quartz particle, which is dependent on the source and history of samples. Assuming weathering of minerals causes such difference in OSL properties, we have performed irradiation of ion beams to quartz samples and studied the OSL properties.

OSL 年代測定では、自然放射線被曝によって蓄積した発光中心の再結合を観測している。石英は長石と並ぶ OSL 年代測定に用いられる試料であるが、産地や履歴により、あるいは粒子ごとに OSL の感度の違いがある。そのため、SAR (single aliquot regenerative-dose) 法などが経験的に用いられており、また弱い青色光のもとで短時間に発光する、いわゆる Fast 成分が卓越した試料が年代測定に適しているとされている。実際、同じ放射線被曝量に対する OSL 発光量と同様に Fast 成分の割合も試料によって異なっており、また繰り返し標準的な OSL 測定を行うことにより OSL 感度に変化することも知られている⁽¹⁾。

本研究では、試料に依存する OSL 発光量および Fast 成分の割合に注目し、これと不純物または構造的な欠陥との関連の解明を目的とした。まず履歴の異なる 4 種の石英砂を準備し、イオン照射により構造欠陥および不純物元素を注入した。イオン種は He^+ 、 O^+ 、 Li^+ 、 Eu^+ の 4 種類を用意し、高崎量子応用研究所および大阪大学理学研究科バンデグラフ加速器施設にて、加速電圧 400kV、1.8MV、3.0MV でそれぞれ照射 (100nA-1

μA , 0.2 – 200s) を行い、照射後それぞれの試料に 500°C 1 時間の加熱操作を行った。

イオン照射のみを行った試料では OSL 発光量に変化は見られなかったが、その後 500°C 1 時間の加熱を行った試料では、イオン種・照射エネルギーに関わらずイオン照射量とともに発光量が増加し、特に Li^+ を照射した試料で 40 倍まで増加した。また元々 Fast 成分の観測されなかった石英砂に対して、照射後の加熱によってイオン照射量の増加に相関して Fast 成分の割合が最大 7 倍まで増加し、その後一定値に収束する傾向が見られた。その収束値は試料によって異なり、試料中の Al 不純物元素濃度と相関する結果が得られた。

結果として、イオン照射により形成された発光中心の増加と不純物としての Li の存在、あるいは熱処理による構造的な妨害中心の緩和が OSL 発光量の増加に寄与するらしきことがわかった。また Fast 成分の存在しなかった試料に Fast 成分を付与することができた。

References

- (1) F. Preusser et al., *Radiation Measurements* **41**, pp.871-877. (2006)

核融合炉用超電導磁石絶縁材料の照射効果に関する研究

工学研究科 環境エネルギー工学専攻^a

西嶋 茂宏^{a*}、秋山 庸子^a、三島 史人^a、高橋 知寛^a、小林 浩二^a

Study of Irradiation Effect on Insulation Material for Superconducting Magnet of Nuclear Fusion Reactor

Graduate School of Engineering^a

Shigehiro Nishijima^{a*}, Yoko Akiyama^a, Fumihito Mishima^a, Tomohiro Takahashi^a, Koji Kobayashi^a,

The insulating materials to be used for the superconducting magnets in the nuclear fusion reactor are needed to have the high mechanical strength at cryogenic temperature under neutron and gamma ray. We have previously investigated the irradiation effect of the glass fiber reinforced plastic (GFRP) by means of gamma ray at the room temperature (RT). Interlaminar shear stress (ILSS) of GFRP, whose matrix consists of cyanate ester and bisphenol A epoxy resin, in liquid nitrogen temperature (77K) was measured. ILSS increased slightly by gamma ray, whereas the molecular chain scission was observed in its matrix. However, the actual irradiation environment of insulating materials is cryogenic temperature. Thus we should evaluate whether the similar phenomena above are also observed under the radiation environment at cryogenic temperature. In this study, we examined the irradiation effect of GFRP at 77 K. Based on the results, the difference of irradiation effect between at RT and at 77 K was discussed.

1. はじめに

現在開発が進められている国際熱核融合実験炉 (International Thermonuclear Experimental Reactor, ITER) で使用される超電導磁石の中で、トロイダル磁場 (Toroidal Field, TF) コイルは、核融合反応由来の高速中性子フルエンスは 3.2×10^{21} n/m² に達する。また、電磁力によって最大 45 MPa のせん断応力が TF コイルには負荷される。さらに、冷媒には超臨界ヘリウムが使用されることから、核融合炉で使用される超電導磁石の構成要素は、放射線環境下、極低温において優れた機械的強度を維持することが要求されている。

超電導磁石の構成要素のうち、絶縁材料はガラスクロスとポリイミドフィルムを積層し、隙間を有機高分子材料である樹脂を含浸させた複合材料であるが、有機高分子は一般的に放射線感受性が高い。また、層間せん断強度 (Interlaminar Shear Stress, ILSS) が低いという問題点もあることから、絶縁材料のマトリックスの照射効果と界面の照射効果の評価は非常に需要である。

2. 室温照射による照射効果の検討

我々はこれまでに、シアネートエステル (Cyanate ester, CE) とビスフェノール A 型エポキシ樹脂 (Diglycidyl Epoxy resin of Bisphenol A, DGEBA) の混合樹脂をマトリックスとしたガラス繊維強化プラスチック (Glass Fiber Reinforced Plastics, GFRP) を作製し、大気雰囲気環境下 (RT) で γ 線を照射して照射効果を調査してきた。ILSS 試験では目違い切欠き試験片を使用し、試験温度は液体窒素温度 (LNT, 77 K) とした。図 1 に試験の様子と試験片の概略図を示す。放射線照射は、⁶⁰Co 線源により γ 線を最大 10 MGy まで照射した。

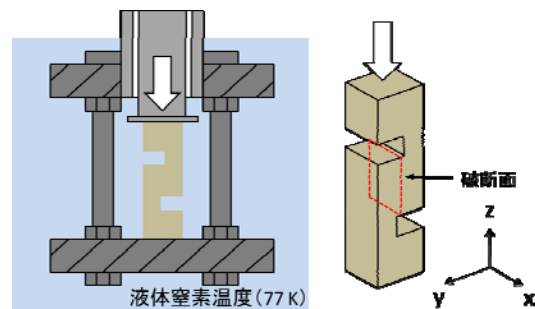


図 1 ILSS 試験の様子と目違い切欠き試験片

* S. Nishijima, 06-6879-7896, nishijima@see.eng.osaka-u.ac.jp

図2にILSS試験の結果とマトリックス樹脂に対して実施した動的粘弾性測定(Dynamic Mechanical Analysis, DMA)で得たガラス転移温度Tgの結果を示す。γ線照射後、ILSSは若干増加し、Tgは低下した。またFT/IRを実施したところ、カルボニル化合物の増加が見られ、結果として分子鎖の切断が確認された。同様な結果は先行研究でも確認されている¹⁾。

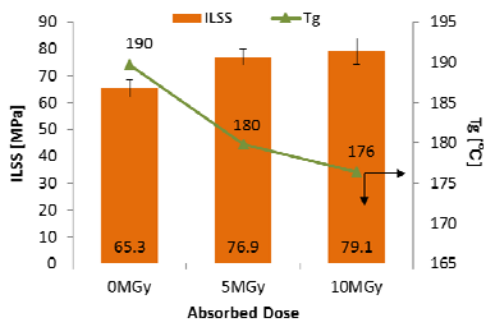


図2 ILSSとTgの関係

3. 現在の問題点と研究目的

ITERでの使用環境を考慮すると、実際の絶縁材料に対する照射環境は極低温である。また、ITERの稼動と停止を考慮すると、絶縁材料がさらされる温度は変化することが考えられる。したがって、本研究ではILSSの上昇と分子鎖切断という2つの事実に対して、

(i) 極低温環境下でのγ線照射でも同様な現象が起きるのか

(ii) 極低温環境下における照射後の温度変化によってこの現象は影響されるのか

という2つの観点を評価することが重要であると考えた。そこで、GFRPに対して大気雰囲気環境下(以下、室温照射)と液体窒素環境下(以下、低温照射)でγ線をそれぞれ照射し、試験片に対して温度変化を与えた後ILSS試験を実施することで、照射効果について評価することとした。

4. 低温照射の検討

実験に使用したGFRPは、マトリックスにDGEBAとポリエーテルアミン硬化剤を混合したものを使用した。

今回は室温照射と低温照射による照射効果の違いに注目するため、室温照射において吸収線量が増加するにつれてILSSが大きく低下することが確認されているDGEBAによるGFRPで実験を行った。試験片に対しては、大気雰囲気環境下と液体窒素環境下でそれぞれγ線を照射してILSS試験を実施した。また、ILSS試験での試験片の形状、および試験方法は図1に示した方法と同様な手法とし、⁶⁰Co線源によりγ線を最大3MGyとした。

表1にγ線照射温度と試験片の温度履歴を示す。温度履歴については、AはRTからLNTまで冷却、BはRTまで昇温し再度LNTまで冷却、CはLNT維持をそれぞれ示している。Bの昇温方法としては、24時間以上RT乾燥させた。

表1 照射温度と温度履歴

コンディション	照射温度	温度履歴	実験温度
①	RT	A	LNT
②	LNT	B	LNT
③	LNT	C	LNT

図3にそれぞれの温度条件におけるILSS試験の結果を示す。吸収線量が3MGyまでは照射温度および温度履歴の違いによるILSSの有意な変化は見られなかった。ただし、Condition②についてはややILSSが低下する傾向が見られた。この現象については有意な差であるかどうかを含め検討中である。また、吸収線量を10MGyとした実験を現在進めている。

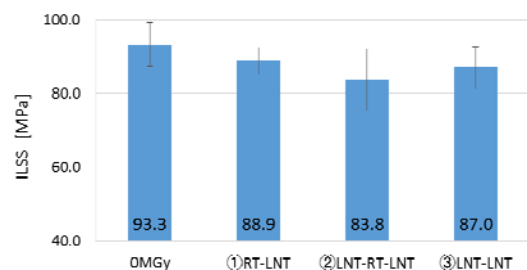


図3 RT照射とLNT照射によるILSS

References

1) Jingwen Li, et al : Fusion Engineering and Design, VOL.89, Issue 12, pp.3112-3116, 2014

電離放射線による突然変異生成の分子機構の解析

ラジオアイソトープ総合センター^a、産研量子ビーム科学研究施設^b、福井大学附属国際原子力工学研究所^c

清水喜久雄^{a*}、藤乗幸子^b、松尾陽一郎^c

Molecular analysis of ionizing radiation induced mutations in the budding yeast

Kikuo Shimizu^a, Sachiko Tojo^b, Youichirou Matuo^c

Radioisotope Research Center^a, Research Laboratory for Quantum Beam Science^b, RINE, University of Fukui^c,

Our research group has been studying ionizing radiation induced mutation of the budding yeast, S288c (*RAD⁺*) as model of eukaryote cell. The yeast cells were irradiated with carbon ions (¹²C⁵⁺; 290 MeV). Carbon ion beam was generated from synchrotron in HIMAC. When we analyzed the survival rate with different radiations, the survival rate was reduced along with the LET. While the mutation frequencies were enhanced along with the LET. The mutation frequency increased consistently with LET. This result indicates the high LET ion beam is more mutagenic than low LET ion beam. Moreover, we examined the new method to evaluate DNA lesions caused by low or high LET radiation using a polymerase chain reaction. We obtained the result that the efficiency of DNA synthesis decreased with increasing LET. It means that DNA lesions, in particularly double-strand breaks, affect the rate of DNA synthesizing reaction. This result shows the possibility that this method will be used to evaluate simultaneously the biological effects caused by various radiations with low or high LET.

【研究の目的とバックグラウンド】

現在、がん治療をはじめとして、粒子線の医学応用や遺伝子資源の開発への利用が急速に広がっている。我々は電離放射線照射による生体効果の研究、特に細胞致死及び突然変異生成に関する基礎的なメカニズムの解明のために、出芽酵母をモデルとした生存率、突然変異率、シーケンス解析による突然変異スペクトルを調べた。また、粒子線に特徴的な DNA 損傷を評価するための手法を開発するために、ポリメラーゼ連鎖反応を用いた DNA 鎖損傷量の解析方法について検討を行った。

【すでに得られている結果】

1) 電離放射線による *URA3* 突然変異スペクトルの解析；粒子線照射による突然変異生成機構を

解析するために出芽酵母の S288c 株を用い、LET:13 ~107 keV/μm の炭素線を照射した場合の致死率・突然変異率を評価した。この結果から、致死率及び突然変異率は LET に依存することが示された。また、シーケンス解析の結果から、炭素線及びガンマ線では一塩基置換が起こるが、炭素線ではガンマ線とは異なり変異部位が主にヌクレオソーム構造のリンカーDNA 領域に局在して生じることが示された。

2) ポリメラーゼ反応を利用した DNA 損傷の評価；電離放射線を照射した DNA の損傷量を評価するために、照射した DNA を PCR の鋳型として、リアルタイム PCR 法を用い評価した。PCR 法の原理から、鋳型となる DNA に放射線照射による

* K. Shimizu, shimizu@irc.osaka-u.ac.jp, 06-6850-6103

損傷があれば、ポリメラーゼ連鎖反応を阻害すると考えられる。すなわち、ポリメラーゼ連鎖反応での DNA 合成効率から、鋳型として機能する未損傷の DNA 量を評価できると考えられる。

【研究結果】

電離放射線照射による *URA3* 突然変異スペクトルの解析；高 LET 粒子線に独特の突然変異を明確にすることを目的とし、LET が 13、25、107 keV/μm の場合での変異スペクトルを評価した。結果を表 1 に示す。炭素重粒子線及びガンマ線に共通する特徴として、主に置換変異 G・C→T・A トランスバージョンが起こることが示された。また、13、25 keV/μm の炭素重粒子線の照射では、A・T→T・A トランスバージョンの割合が高くなることが示唆された。2-OH-dATP は G・C→T・A トランスバージョンの他に、5'-TA*A-3' (A*=2-OH-Ade)配列の場合に A→T のトランスバージョンを誘発することが報告されている。また、ガンマ線および 13、25 keV/μm の炭素重粒子線の照射により誘発した突然変異は、すべて 1 塩基の置換・欠失・挿入変異であった。一方で、LET が 107 keV/μm (290 MeV)の炭素重粒子線(JAEA、TIARAにて照射。比較のために実施)については、数 bp 以上の欠失が見られた。LET によって生じる突然変異のサイズが異なることが示唆された。

2) ポリメラーゼ反応を利用した DNA 損傷の評価；炭素線及びガンマ線を照射した DNA の損傷量を評価した。1)の実験で用いている出芽酵母 S288c の *URA3* 領域(804 bp)を PCR 法によって増幅し精製した反応物を DNA サンプルとした。DNA サンプルに対し、放射線医学総合研究所 HIMAC で炭素粒子(290 MeV, LET:50 keV/μm)を照射した。吸収線量は 0.05Gy-1 Gy である。照射したサンプル DNA を鋳型とし、MiniOpticon システム®(Bio-Rad)を用い、未損傷の鋳型 DNA の量を評価した。ここで、解析対象となる *URA3* 配列は、我々の先の研究により突然変異のホットスポットが確認された領域(約 200bp)である。さらに、リアルタイム PCR 法での通常の操作では 1 種類のプライマー(十数塩基の短い DNA)を用いて特定の領域の DNA 領域を合成するが、本研究では 1 種類のプライマーセットならびに 3 種類のプライマーセットを用いて解析を実施した。

表 1. シーケンス解析による出芽酵母での変異スペクトル

	炭素線 LET:107keV/μm JAEA-TIARA	炭素線 LET:25keV/μm NIRS-HIMAC	炭素線 LET:13keV/μm NIRS-HIMAC	ガンマ線 LET:0.2keV/μm 大阪大学・産研	
トランスバージョン	G:C to T:A	21 41.2%	2 20.0%	11 22.0%	13 43.3%
	G:C to C:G	12 23.5%	0 0.0%	6 12.0%	3 10.0%
	A:T to C:G	1 2.0%	1 10.0%	0 0.0%	4 13.3%
トランジション	A:T to T:A	1 2.0%	2 20.0%	12 24.0%	0 0.0%
	G:C to A:T	7 13.7%	1 10.0%	9 18.0%	6 20.0%
	A:T to G:C	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
	欠失	※8 15.7%	1 10.0%	9 18.0%	2 6.7%
挿入	1 2.0%	3 30.0%	3 6.0%	2 6.7%	
Total	51 100.0%	10 100.0%	50 100.0%	30 100.0%	

※数bp以上の欠失を含む

加速器を用いた材料改質と新規機能性材料創製に関する研究 ～低エネルギー電子線照射装置安全対策と実験室整備～

産研ナノ極限ファブ리케이션研究分野^a、阪大ダイキン共同研究講座^b

近藤孝文^{a*}、吉田陽一^{a**}、足達健二^b、佐藤数行^b、

Study of the material modification and the invention of new functional materials using an accelerator

Dept. of Advanced Nanofabrication^a, Daikin Industries Joint Research^b,

Takafumi Kondoh^{a*}, Yoichi Yoshida^{a**}, Kenji Adachi^b, Kazuyuki Sato^b

For modification of various polymeric materials (mainly fluorine-based polymer), high dose radiation by using a low energy electron beam accelerator was used at ISIR, Osaka University. And also establishes a novel ultra-fine processing technology using an electron beam nanoimprinting. Samples after irradiation, the evaluation of physical properties in the laboratory.

電子線を用いた高分子材料の架橋や官能基のグラフト重合が、高分子材料の改質や高機能化のために、幅広く行われている。高分子基材とその架橋やグラフトする官能基の種類と量を制御することにより種々の有用な機能を付加することができる。例えば高分子フィルムに低エネルギー電子線を照射することにより架橋・接着して、木材表面の装飾と高強度化、耐水性強化を図ることができる。

このような架橋やグラフト重合の初期過程は、放射線照射により基材のイオン化を経たラジカルの生成により、“継ぎ手”の基材への導入である。その後官能基をもった分子の溶液に含浸してラジカル反応させることによりグラ

フト重合する。グラフト量は、放射線の線量と基材のラジカル生成G値、ラジカルの反応経路および寿命に依存する。ラジカルはラジカル-ラジカル終端反応するので高線量では失活するが、基本的にはラジカル量をより多く発生させられれば機能制御の幅を広くできる。

低エネルギー電子ビーム加速器は、DC電子銃が発生する電子を加速することにより空気中に取り出して電子線を照射し、ほぼすべての電子が基材に入り数十マイクロメートルでエネルギーをすべて付与するために、線量が非常に高いことが特徴である。線量が高ければ、基材中のラジカル量を増やすことが可能となる。本研究では、低エネルギー電子加速器からの電子

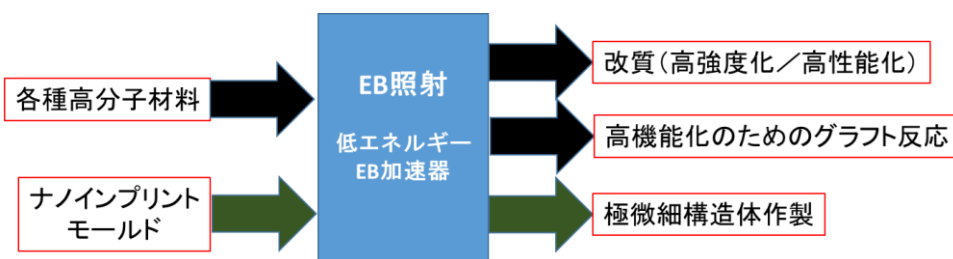


Fig.1 Functionalization of various polymer materials by irradiating of low energy electron beam

* T. Kondoh, 06-6879-4285, t-kondo@sanken.osaka-u.ac.jp; **Y. Yoshida, 06-6879-4284, yoshida@sanken.osaka-u.ac.jp



Fig.2 Development of chemical laboratory

ビームを用いて、主にフッ素系高分子材料に高線量照射を行い、材料を架橋させることによる改質やグラフト重合による機能付与を行う。また、電子ビームナノインプリント法による新規な極微細加工技術を確立する。

電子線照射装置は、量子ビーム科学研究施設に設置した岩崎電気製 EC250/15/180L を用いる。マルチフィラメント方式により大量の電子を発生し、垂直下方に加速照射する。有効照射幅は、150 mm で加速電圧は、150 ~ 250 kV、ビーム電流は1~10 mA であり、吸収線量は、1800 kGy×m/min である。Selfshield 方式により本体表面で漏洩線量は、2.6 μ Sv/hr 以下に抑えられており設置に放射線管理区域を設定する必要がない。本装置の特徴は、経済性、信頼性、安全性が高く、保守・運転の容易な装置であることと、250 kV の加速電圧と1800 kGy×m/min の非常に大きな処理能力を持つことであり、広範囲の実験を可能としている。この低エネルギー電子線照射装置は、四国経済産業局から大阪大学産業科学研究所への無償貸付による物品であり、今後、試験・研究目的のために、有効活用される予定である。

本年度は、化学実験室としての整備を行い、安全チェックを行って指摘事項を対策した。化学薬品庫およびドラフトを設置し、冷蔵庫、実験台、器具乾燥機の設置を行った。また安全対策として、電子線照射装置の試料搬入部にカーテン状のセ



Fig.3 Curtain-like sensor for finger pinch prevention at the sample entrance of accelerator

ンサーを取付けて、指詰め防止対策をした。また、本装置は、照射部の冷却と、酸素によるラジカル捕捉を抑制するために5 m³/h 程度の窒素を流す。そのための窒素ポンペを設置したが、排気ポートはなく、装置から自然流出するということから、酸欠防止のために本装置全体を囲む簡易排気ブースを設置し、排気するように工事を行った。今後フッ素系高分子基材への照射を行い、改質や機能化の実験を行う。



Fig.4 Exhaust booth around the electron beam accelerator for oxygen deficiency prevention

γ線照射したバサルトファイバーの ESR 測定

大阪大学 大学院理学研究科^a、日本原子力研究開発機構^b

谷 篤史^{a*}、坂之上 聖史^a、深澤 裕^b

ESR measurements on gamma-irradiated basalt fiber

Dept. of Earth and Space Science, Osaka University^a,
Japan Atomic Energy Agency^b

Atsushi Tani^{a*}, Masafumi Sakanoue^a, Hiroshi Fukazawa^b

We investigated gamma-irradiated basalt fiber by electron spin resonance (ESR) at room temperature. ESR spectrum of unirradiated basalt fiber shows two broad ESR signals at 160 mT ($g = 4.3$) and 340 mT ($g = 2.0$). They are typical ESR signals due to ferric iron ion (Fe^{3+}). ESR spectra did not change obviously after gamma irradiation even at high dose about 46 kGy. Although we expected to detect radiation-induced point defects, they may be thermally unstable and release trapped electron and/or hole at room temperature.

バサルトファイバー(バサルト繊維)とは玄武岩を原料とした繊維状の素材(図1)で、密度が 2.75 g/cm^3 とシリカ繊維の 2.15 g/cm^3 に比べて大きな値を持つのが特徴である[1]。原材料が玄武岩であることから安価で、環境に優しいとされており、耐火素材や補強材等に使用されている。また、有機素材に比べ放射線に対する高い耐性が期待されることから、放射性廃棄物の保存容器への使用も検討されている。しかし、バサルトファイバーの照射効果について検討した研究がないことから、本研究ではγ線照射によりバサルトファイバーに誘起される欠陥の有無や種類について、ESR法による検討を行った。



図1. バサルトファイバーの写真。

バサルトファイバーをアルミ製の袋にいれ、産研の⁶⁰Coを線源とするγ線により常温で照射を行った。照

射距離を変えることにより複数の照射線量率で照射し、照射時間は6時間、24時間、48時間とした。照射後の試料をラボに持ち帰り、ファイバーをはさみで約1.5 cmの長さに切ったものをESR測定試料とした。計測にはXバンド(9 GHz) ESR分光器(JEOL JES-FA200)を用い、ESR試料管にバサルトファイバー試料を入れて測定を行った。磁場変調は100 kHz、0.1 mT、マイクロ波強度は1 mWとした。

異なる照射量のバサルトファイバーのESRスペクトルを図2aに示す。磁場が160 mT($g = 4.3$)と340 mT($g = 2.0$)の2ヶ所に主な幅広のESR信号が確認され、両者とも Fe^{3+} に起因するESR信号であることがわかった[2]。鉄イオンを含む主要な玄武岩の構成鉱物はカンラン石($(\text{Mg,Fe})_2\text{SiO}_4$)や輝石($(\text{Mg,Fe})\text{SiO}_3$)で、両者ともマグネシウムと鉄が固溶するケイ酸塩鉱物である。鉄を含むカンラン石のESR測定を行ったところ Fe^{3+} の信号は皆無であったことから[3]、鉄イオンは Fe^{3+} ではなく Fe^{2+} で存在していることがわかる。カンラン石を空气中で加熱し一部の鉄イオンを酸化させた場合、 $g = 2.0$ 付近のESR信号が増加することが知られている[3]。図2に見られた Fe^{3+} は、原料に含まれる鉄イオンの一部がファイバー製造時に酸化されたことによるものであると考えられる。また、γ線照射前後でESRスペクトルに優位な違いは見られなかった。

図2bに340 mT近傍のESRスペクトルを示す。石英などケイ酸塩鉱物に放射線により生成する点欠陥のESR信号(Fe^{3+} の信号に比べ細い線幅をもつ)は主にこの磁場範囲に見られるが[4]、図3には Fe^{3+} に起因

* A. Tani, 06-6850-5540, atani@ess.sci.osaka-u.ac.jp

する信号(バックグラウンドの傾きとなっている)のみが計測された。図2b)に用いた試料の最大照射線量は46 kGyであった。石英では数十Gyの照射量から石英のダングリングボンドであるE'中心や酸素正孔中心が見られることから、顕著なESR信号が見られなかった理由は照射線量不足ではない。

カンラン石のマグネシウム単成分であるフォルステライト(Mg_2SiO_4)への γ 線照射では酸素空孔などに起因すると見られるESR信号が観察されている[5]。一方、鉄を含むカンラン石への γ 線照射では顕著なESR信号が見られていない。このことは、同じ結晶であるカンラン石でも γ 線照射により生成する点欠陥の熱安定性は鉄イオンの有無により大きく変化し、常温で容易に緩和していることを示している。バサルトファイバーでも鉄イオンを含むことが一つの理由で、放射線により誘起される欠陥が観察できなかったのではないかと考えられる。

一方、バサルトファイバー製造時に何らかのバインダーが用いられているとのことであった。もし、バインダーが有機物であれば、有機ラジカルの信号が計測できるのではと期待していたが、あらわに見ることはできなかった。よって、有機物が混入しているとしても微量であると予想される。

γ 線照射によりバサルトファイバーに起こる変化をESRでとらえるべく実験を行ったが、優位な変化を計測することはできなかった。欠陥を生成するには十分な線量を照射しているため、緩和がすでに起こっていると考えてよいと思われる。照射前と同じ状態へ戻っているか、あるいは不対電子を持つ状態がないだけで、異なるものへ変化しているのか、現時点では判断できないが、もし前者であるなら、バサルトファイバーは放射線による耐性が高く、高い放射線量の現場での素材として有効である可能性がある。

Reference

- 1) M. Swink: *Techtextil North America Symposium*. Atlanta (2002).
- 2) U. Schwertmann: *Iron in Solid and Clay Minerals*. Dordrecht: NATO ASI series (1985).
- 3) Y. Yamanoi: *Ph.D Thesis*. Osaka University (2008).
- 4) M. Ikeya: *New Applications of Electron Spin Resonance - Dating, Dosimetry and Microscopy*. Singapore: World Scientific (1993).
- 5) 外内宏樹: 卒業論文. 大阪大学 (2009).

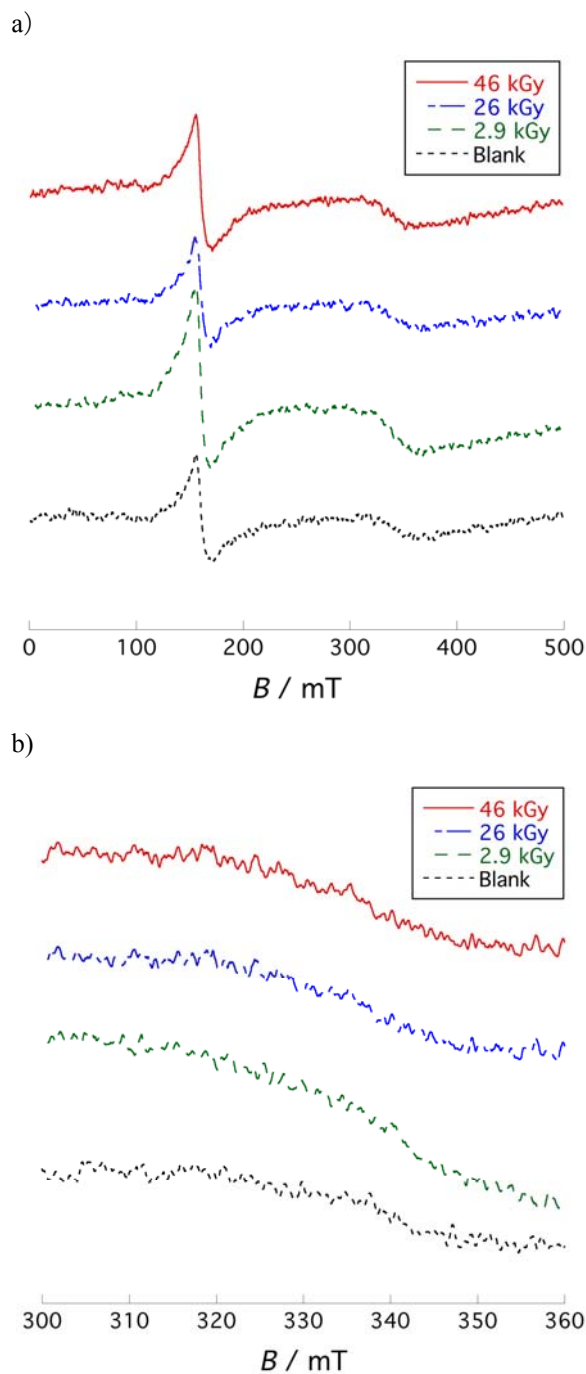


図2. バサルトファイバーのESRスペクトル. a)は磁場範囲が0-500 mTのスペクトル, b)は300-360 mTのスペクトル. 各図の下から順に未照射, 2.9 kGy照射, 26 kGy照射, 46 kGy照射の試料である。

高強度赤外光照射による新規物質創成と新規物性発現

永井正也^a・川瀬啓悟^b・入澤明典^b・磯山悟朗^b

^a 大阪大学大学院基礎工学研究科、^b 大阪大学産業科学研究所

(背景と目的)

加工や加熱、光記録など高強度の電磁波を照射し物質を能動的に操作することは電磁波応用として重要である。THz 周波数帯においても同様の高出力 THz 光源の応用展開が可能である。THz 周波数帯には分子間振動など固相を掌る振動モードがあり、このモードを共鳴強励起することで生じた非熱的ソフト化は、一般的な光励起とは異なる新しい原子・分子のアブレーション過程が期待できる。

大阪大学産業科学研究所量子ビーム施設では THz 領域に特化した高強度自由電子レーザー(FEL)を有している。この光源は中心周波数やパルス幅、出力強度の観点で通常のレーザーベースの THz 光源では実現できない領域をカバーしており、このような応用探索を行うのに適している。そこで有機物質に照射した際のアブレーション過程を発光や飛行時間型質量分析を行うことで解明することを試みた。

一方で、数 MV/cm のコヒーレントな高強度 THz パルスを固体に照射すると、高次高調波発生やインパクトイオン化など、バルクの物質固有の様々な極端非線形現象が起こる。一方で強電場が界面に印加されると電界電子

放出が生じ、金属ナノ構造の高強度 THz 電場応答が議論されている。したがって半導体ナノ材料では両現象の競合によって発現する新しい極端非線形現象が期待される。そこでバンドギャップ(3.4eV)とイオン化エネルギー(4.5eV)が比較的近い値を持つ、直接遷移型半導体 ZnO に注目し、高強度 THz パルスを ZnO ナノ微粒に照射した際の発光を調べた。

(実験結果：有機結晶の脱離イオン化)

FEL パルス光をスクロースやラクトースなどの糖類に照射すると、微結晶表面からエアロゾルのはじけるように発生する。FEL の励起周波数は分子間振動に共鳴していることから、大振幅分子間振動による急激な体積膨張によって非熱的なアブレーションが生じたと考えられる。ただしある励起光強度以上では照射付近 C₂ ラジカルに起因する緑色発光に加えて微結晶表面からの電子放出による窒素の紫外発光も見られた。

これらの発光を時間分解で測定したところ、エアロゾル発生時に見られる緑色発光や紫外発光はマクロパルスの後半で現れることが分かった。このような発光強度は分子間振

動による吸収に応じて強く現れ、ある励起周波数で対応する電子温度が著しく減少している様子が見られた。これらの結果から、電界電子放出によるアブレーションではなく、分子間振動を介したアブレーションが生じたと考えられる。

また飛行時間型質量分析によるアブレーション後のイオンの直接観測も行い、ある励起周波数でプロトンが励起マイクロパルスごとに放出することを見出した。これはアブレーションの過程で水素結合が切れる際にプロトンが大量に放出したことを示唆している。

これらの現象は、質量分析におけるマトリックスフリーの脱離イオン化のツールとして応用展開が可能である。物質にレーザー光を照射すると、試料が脱離イオン化されずに損傷してしまうことが多い。そこで、レーザー光によって光吸収/イオン化されやすい物質をマトリックス剤として予めサンプルに混合する MALDI が提案された。この手法であっても、分子の損傷（解離）やターゲットに応じたマトリックスの慎重な選択や取扱い、マトリックス剤による生体試料のイメージングの空間分解能の低下など、克服しなければならない課題も多い。そこで質量分析におけるマトリックスフリー脱離イオン化の強い要請から、余剰エネルギーの小さな励起による脱離イオン化法として展開の可能性がある。

（実験結果：半導体ナノ結晶における実験）

大きさ 100nm の ZnO ナノ結晶に THz パルスを照射すると、励起周波数が高い場合は ZnO ナノ結晶からの 3.0eV 近傍のブロードな発光が現れるが、励起周波数が小さくなるにつれて電界電子放出に伴う窒素発光が支配的

となることを見いだした。また時間分解発光測定より 3.0eV 近傍のブロードな発光が現れた後に電界電子放出に伴う大気中の窒素発光が顕著に現れる様子を観測した。これらはインパクトイオン化で増殖された電子が電界放出し窒素を励起したことで説明できる。

研究成果（論文・学会発表・特許・受賞等） 学会発表

- ・永井正也，芦田昌明，川瀬啓悟，入澤明典，加藤龍好，磯山悟朗，冬木正紀，青木 順，豊田岐聡，”有機分子結晶の THz FEL パルスによるアブレーションのダイナミクス”，日本物理学会 2015 年秋季大会 16aCF-8: (関西大学千里山キャンパス，2015 年 9 月 16-19 日)
- ・青野信吾，永井正也，芦田昌明，入澤明典，川瀬啓悟，磯山悟朗，“ZnO ナノ微粒子の THz FEL パルスによる電子放出とインパクトイオン化の競合”，日本物理学会第 71 回年次大会 22aBH-11、(東北学院大学、2016 年 3 月 22 日)
- ・永井正也，“シンポジウム テラヘルツ・赤外領域強電磁場による極限非線形現象の光科学と応用展望 はじめに”，第 63 回応用物理学会春季学術講演会 19p-H135-1 (東工大大岡山キャンパス、2016 年 3 月 19 日)
- ・永井正也，芦田昌明，川瀬啓悟，入澤明典，加藤龍好，磯山悟朗，冬木正紀，青木 順，豊田岐聡，”有機分子結晶の THz FEL パルスによるアブレーションの励起波長依存性”，第 63 回応用物理学会春季学術講演会 22a-H135-11 (東工大大岡山キャンパス、2016 年 3 月 22 日)

イオン液体中での溶媒和電子のダイナミクス

高橋憲司^a, R. M. Musat^a, 近藤孝文^b, 神戸正雄^b, 吉田陽一^b

^a金沢大学理工研究域, ^b大阪大学産業科学研究所

(背景と目的)

イオン液体は、低蒸気圧、広い電気化学窓、難燃性、熱安定性などの特徴的な物性から、有機化学反応溶媒の代替のみならず、色素増感太陽電池など電気化学的デバイスでの利用も進められている。化学反応、電極での電子移動反応では、イオン液体中で生成する溶媒和電子が重要な役割を果たしている。しかしながら、イオン液体中の過剰電子の溶媒和過程およびその各段階における反応性については、未だ明らかになっていない。イオン液体中の過剰電子の溶媒和過程は、双極子-双極子相互作用と双極子配向のような典型的な分子液体とは異なり、イオンの並進移動が重要であると考えられている。速いサブピコ秒でイオンの慣性反応があり、ピコ秒からナノ秒にかけて、それに続く拡散、構造再構成、ケージ形成と変形等の反応が起きると考えられている。これまでの研究で、溶媒和前電子およびドライ電子が非常に反応性が高いことが分かっている。イオン液体は、低温にすることにより、粘性が高くなり、分子運動の顕著な低速化が可能である。本研究では、通常は観測できないピコ秒からナノ秒の時間領域の過剰電子の運動を、イオン液体試料を冷却することによって分子運動を低速化し、ナノ秒パルスラジオリシスを用いて溶媒和過程のダイナミクスを観測した。

(研究方法)

ナノ秒パルスラジオリシス実験は、大阪大学産業科学研究所の量子ビーム科学研究施設付属の

L バンド電子ライナックを利用した。エネルギー28 MeV、パルス幅 8 ns の電子線を試料に照射して活性種を誘起し、キセノンフラッシュランプの光をプローブとし、透過光を分光器に導き、シリコン (200 nm-1000 nm) 及び InGaAs(800 nm-1600 nm) フォトダイオードで検出し、オシロスコープで記録した。典型的な線量は、水標準試料で 118 Gy/pulse である。イオン液体は n-butyl-n-methylpyrrolidinium

bis(trifluoroethanesulfonyl)imide(P14-NTf2) (関東化学) を用いた。ドライオープン中で 60 度、72 時間真空乾燥し、アルゴンガスのバブリングにより脱酸素した。石英セル中の試料は、そのままクライオスタット (ユニソク Coolspek) 中で液体窒素気化ガスとヒーターにより温度制御されたブロックから熱伝導により冷却/加熱した。

(結果および考察)

Fig.1 に、ナノ秒パルスラジオリシス実験から得られた P14NTf2 中の溶媒和電子の $G \times \epsilon$ の温度依存性を示した。 $G \times \epsilon$ は、温度に比例した増加を示した。300K から 220K まで冷却すると溶媒和電子の生成量は、低温にするにつれて減少してほぼ 1/2 となった。溶媒の密度は 2 倍変化しないので、この事は、低温にするほど分子運動は遅くなるにもかかわらず、過剰電子が完全に溶媒和する前に反応して消滅していることを意味する。過剰電子の反応経路はいくつか考えられるが、一つは不純物との反応、もう一つは対で生成した親カチオン (もしくは中性ラジカル) との再結合 (ジェミネートイオン再結合) が考

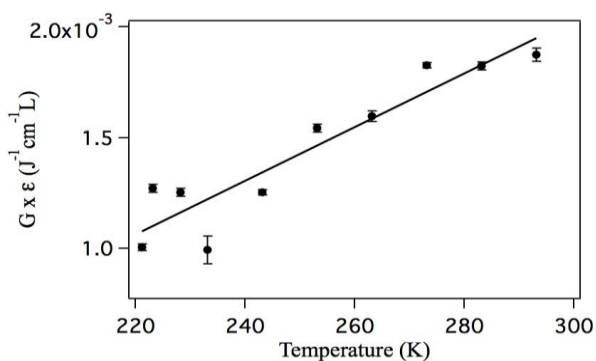


Fig.1. Estimated $G \times \epsilon$ value for the solvated electron in P14NTf2 as a function of the temperature.

えられる。イオン液体にオンサガー理論がそのまま適用できるかは不明であるが、低温にしても熱化距離は変わらず、オンサガー距離は増大するので、再結合の確率が増大し、逃げて溶媒和する確率は減少するとの定性的な説明は可能である。溶媒和過程を理解するために、電子溶媒和過程の時間挙動とスペクトル変化を詳細に測定した。Fig.2 に P14NTf2 中の溶媒和電子の低温でのナノ秒過渡吸収スペクトルを示した。パルスエンド付近では 1200nm に吸収極大を持ち、時間経過につれてブルーシフトした。ある時間におけるシフト量は低温で小さくなった。また、図中矢印のところに若干乱れた等吸収点が見られた。この事は、弱く溶媒和された電子から、強く溶媒和された電子へのシフトを伴った遷移を示唆している。ピーク位置の時間変化の温度依存性を取ると、2つの指数関数でフィッティングできた。この事は、溶媒和過程を2段階であることを示唆している。最初の速い過程は 10ns 程度であり、遅い過程は数 100ns に亘る。これは、アルコール中で見られるような2つの溶媒和経路によるものかもしれない。一つ目は、弱く溶媒和もしくは束縛された電子が生成する過程で、二つ目は、完全な溶媒和電子へと至る過程と考えられる。遅い過程が低温にするにつれて更に遅くなるのは、溶媒和過程が溶媒分子の回転等と関係していることを示唆している。しかしながら、溶媒和過程が、2つの機構による連続的な緩和なのか、状態間遷移かについては未だ結論が出ない。

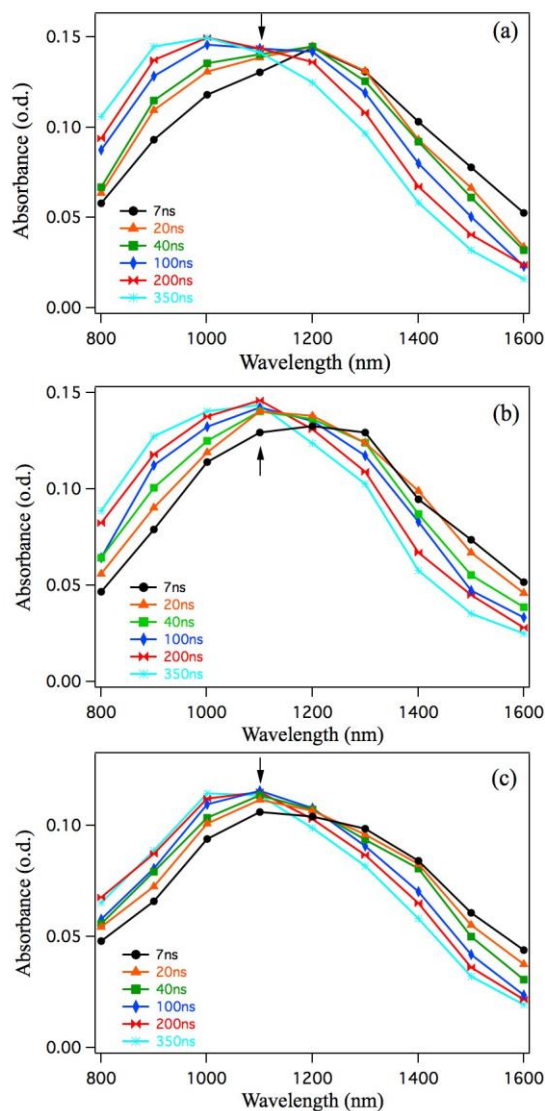


Fig.2 Time evolution of the measured absorption spectra in P14NTf2 sample, at -45degC (a), -50degC (b), -52degC (c).

研究成果 (論文・学会発表・特許・受賞等)

1. R. M. Musat, T. Kondoh, M. Gohdo, Y. Yoshida, K. Takahashi, Radiolytic Yields of Solvated Electrons in Ionic Liquid and Its Solvation Dynamics at Low Temperature, Radiat. Phys.Chem. accepted.

学会発表

- K. Takahashi, R. Musat, T. Kondoh, Y. Yoshida, Spectra and Solvation Dynamics of Excess Electron in Ionic Liquids, 13th Tihany symposium on radiation chemistry 2015, Aug. 29-Sep.3, 2015, Blatonalmadi, Hungary